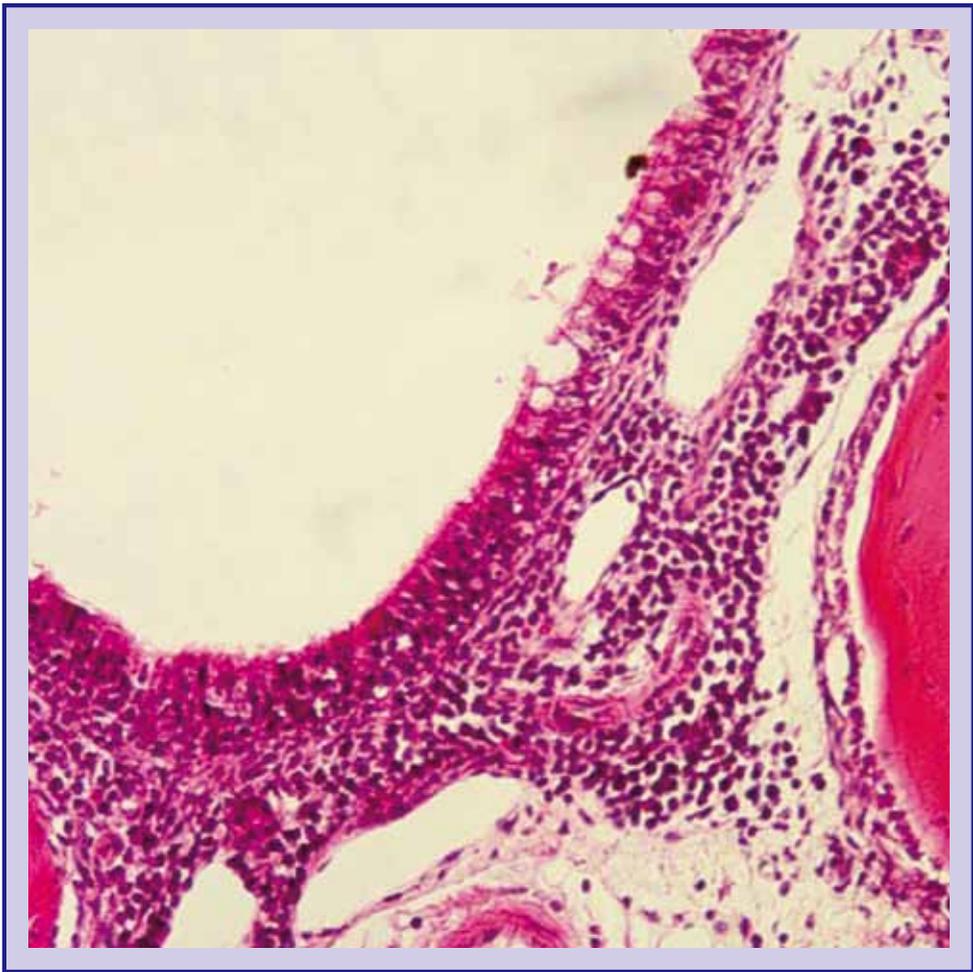


第16号

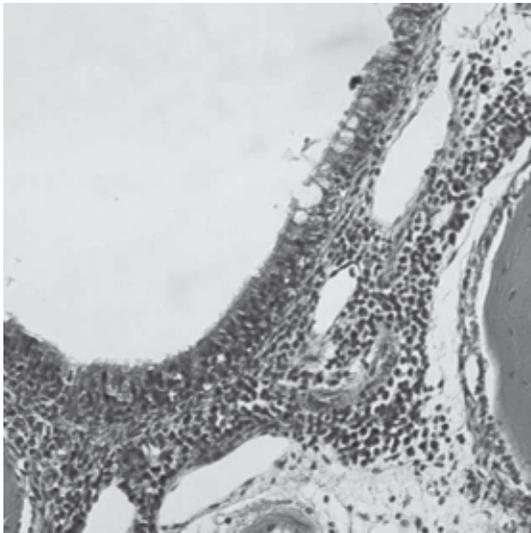
さくらじま

2002



鹿児島大学医学部 耳鼻咽喉科学教室
同門会誌

〔表紙写真の説明〕



<NALT-like-structure of Id2 deficient mice transferred with fetal liver cells>

Id2 欠損マウスには NALT 形成が全く認められない。また二次リンパ組織形成に必須と考えられている CD 3-CD 4+細胞の肝細胞からの分化には Id 2による調節が不可欠である。そこで我々は出生直後の Id 2欠損マウスに野生型胎児肝細胞を移入し、リンパ組織形成の誘導を試みた。移入後1ヶ月の Id 2欠損マウスの鼻腔組織を組織学的に解析した結果、NALT 様のリンパ組織形成を認めた。よって NALT 形成には Id 2により分化誘導された肝細胞由来の CD 3-CD 4+細胞が重要な役割を果たしている事が示唆された。

福山 聡

目 次

I. 卷 頭 言	1
II. 同 門 会	6
III. 教室来訪者	8
IV. 教室行事	9
1. 共催の講演会	9
2. 桜島フォーラム	12
3. 鼻の日 市民講座	13
V. 同門会報告	15
VI. 地域医療報告	18
1. 巡回診療	18
2. 身体障害者巡回相談	18
3. 学校保健（統計報告）	18
VII. 特殊外来通信	22
1. アレルギー外来	22
2. 中耳炎外来	24
3. 副鼻腔炎外来	24
4. 頭頸部腫瘍外来	25
VIII. 病理集計	27
IX. 各省庁諸研究	30
X. 業 績	31
1. 原 著	31
2. 総 説	31
3. その他	32
4. 国内学会発表	32
5. 国際学会発表	38
XI. 医局通信	40
1. 新入医局員紹介	40
2. 医局人事	42
3. 学会報告	43

①	第11回日本頭頸部外科学会	43
②	第13回気道病態シンポジウム	44
③	第19回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会	44
④	第13回日本喉頭科学会総会	45
⑤	第13回日本アレルギー学会春季臨床大会	45
⑥	第102回日本耳鼻咽喉科学会総会	46
⑦	第25回日本頭頸部腫瘍学会, 第22回頭頸部手術手技研究会	46
⑧	第63回日本耳鼻咽喉科臨床学会	47
⑨	第14回日本口腔咽頭科学会総会	48
⑩	第40回日本鼻科学会総会	48
⑪	第11回日本耳科学会総会	49
⑫	第53回日本気管食道科学会総会	50
⑬	4 th Extraordinary International Symposium on Recent Advance	51
⑭	6 th Asian Research Symposium in Rhinology	52
4.	関連病院便り	54
①	国立病院九州循環器病センター	54
②	県立大島病院	55
③	県立北薩病院	56
④	県民健康プラザ鹿屋医療センター	56
⑤	鹿児島市立病院	58
⑥	出水市立病院	59
⑦	済生会川内病院	60
⑧	かごしま生協病院	61
⑨	今村病院分院	62
XII.	関連病院住所と診療日案内	64
XIII.	同門会及び教室員名簿	68
	編集後記	84

「鹿児島大学医学部の動向について思うこと」

黒野 祐一

国立大学独立行政法人化，大学院重点化（部局化），医学部・歯学部附属病院統合センター化，卒後研修ローテーションの必須化，等々，今大学のあり方そしてシステムが大きく変化しようとしています。当初，これらはすべて形式的なものであって，本質的にはあまり変わらないのではないかと高を括っていましたが，委員や世話人に指名され関わりが深まるにつれ，これらが大学改革と呼ばれる所以を実感しているこの頃です。また，同時にこうした構想は個々には素晴らしいアイデアではあるものの，互いに矛盾点が多いことにも気づきました。

たとえば，独立行政法人化によって大学附属病院はこれまで以上に自主経営力が必要とされ，我々も収益を重んじた診療を強要されます。その一方で，大学院部局化によって教育にも重きが置かれ，その対象は学部学生ではなく大学院学生になります。ところが，医師国家試験合格率の向上を迫られ，教室員に加えて卒後研修医の教育も義務付けられることとなります。しかも，教官の数は増員されるどころか，定員削減で減らされるのですから大変です。現行の臨床，研究，教育ですらままならない毎日を過ごしているというのに，こうした新しいシステムの中で全ての業務を遂行することは，現時点では不可能としか言えないように思われます。お上は我々を酷使し，リストラしようとしているのではないかと疑ってみたくもなります。

仕事が忙しくなると，緊張感があるうちはまだ良いのですが，どこかでふと集中力が途絶え，不注意や手抜きによる過ちや事故を招くことがあります。最近新聞でも取りあげられたように，医療過誤の件数は年々増加し，かつては考えられない数にのぼっています。これまでは単に表面化しなかつただけとか，実際はもっと多いのではないかなどという医療関係者の声も聞かれますが，患者さんの医師を見る目がさらに厳しくなってきたことは事実です。他施設と同様に当病院でも，リスク・マネジメント委員会が発足し，インシデントやアクシデントのまとめと解析ならびにその予防法を検討していますが，報告数が減少する傾向はまだありません。医療ミスを見出しこれを予防すること

は可能であっても、医療事故は不測の状況で発生することが少なくないため、制度やシステムを作るだけではこれを防止できないという話を聞いたことがあり、今後の多面的な検討が望まれます。

大学がこれから直面する環境の変化は、我々の予想を遥かに上回るものかもしれません。そして、勤務医や開業医の先生方におかれましても、医療行政改革の方向性が気になるかと思います。激動の21世紀初頭、この時勢を乗り切るためには、健康の維持と体力の増進が不可欠です。同門そして地方部会会員のみなさまの益々のご健勝をお祈り申し上げます。なお最後に、これが私のゴルフの回数が最近増えたことの言い訳ではないことを申し添えます。

“Y O U T H” of seventy-four

調 賢 哉
(調 耳鼻咽喉科クリニック)

Youth is not a time of life—it is a state of mind :

it is a temper of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions, a predominance of courage over timidity, of the appetite for adventure over of ease.

Nobody grows old by merely living a number of years ; people grow old only by deserting their ideals.

— Samuel Ullman —

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。逞しき意志，優れた創造力，炎ゆる情熱，怯懦を却ける勇猛心，安易を振り捨てる冒険心，こう言う様相を青春と言うのだ。年を重ねただけでは人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。

—サムエル・ウルマン—

すでに30年以上前のお話であるが，父の思いもかけぬ急逝によって調耳鼻科をやめようかという話になった時，母は「3人も男の子が医者になっているのに，調耳鼻科がつぶれるとは」と号泣した。

その時，私は180度転換せざるを得ないと覚悟した。学生時代から夢みて励んできた又，周囲からも期待されていた教職，医学者への道をあきらめて，順風満帆であった鹿児島大学助教授の職を辞し，郷里の日田市に帰り，父の医業を継承した。

しかし，同じ開業するなら，今迄培った知識，技術を「本当に患者さんのために役立つ治療，世の中に役立つ治療」をしようと考えた。その甲斐あって，次第に患者さんの信頼を得て，大分県，及びその近隣だけでなく，九州全体，対馬，壱岐更に中国地方，四国地方からも時には大阪，東京からも受診するようになった。特筆したいことは，鹿児島の出水地方からの受診者が多い事である。これは，私の第七高等学校生時代，戦災で鹿児島の城山の麓にあった七高校舎が全焼し，昭和21年，22年と出水の航空隊跡に移

転していた。その後の下宿の人達（もう世代も変わっているが）が今でも「調さあ」と慕ってくれ、その後、昭和35年頃、数年間鹿大耳鼻科助教授として在職していた事と相まって、出水地方だけでなく南九州全体に「調さあ」はかなり名が通っていることである。

更に、診療のかたわら、治療上の疑問点を解決してゆき、その成果を学会、専門誌に発表していった。すでに70歳を越した現在でも、1日150人以上の外来をこなし、全国各地から来られた難病の患者さんと取り組み、更に手術を行い、研究し学会発表も専門誌への投稿も年に2～3編に及び睡眠時間4乃至5時間で励んでいる。

私はいつまでも肉体的にも精神的にも若さを保つには冒頭のウルマンの詩にあるような「心の若さ」であると思う。この「心の若さ」に一番必要なのは絶えず何かを追求してゆくことである。趣味でもスポーツでも恋でもよいであろう。しかし、医者としては医学を追求するのが最もよい。私は今、三つのことを追求している。その第一は抗生剤としてクラリスロマイシン、及びアレルギー剤としてアゼプチンを内服させながら中鼻道よりキリアン氏カニューレを挿入し、上顎洞を洗浄する方法を中心とした幼小児副鼻腔炎の治療である。この方法は従来は成人にのみ応用されていたのであるが私は幼少児にも応用できる事を知って成果を上げている。実によく治る。患児の両親から長い間治療して治らなかったのが一回の洗浄で治ったと感謝される時は、医者冥利につきる。この方法は国内の学会では各地で発表したが、特に金沢における第36回日本鼻科学会でのシンポジウム「小児副鼻腔炎の治療」でも特別発言として発表した。更に海外でもロンドン、マドリッド、アムステルダム、ローマ、イスタンブール、他で発表し、反響があった。ロンドンではタイから同様な発表があったが、こんな方法はヨーロッパの子供には応用できると言われた。最近は2000年6月、バルセロナの国際学会で発表した。第二には私の開発したキリアン・調（KS）額帯鏡（従来のキリアン額帯鏡に明るい光源（光源装置）からグラスファイバーで光を導いた）で非常に明るく通常の診療、手術、更に直達鏡検査（キリアン式）に非常に役立っている。特に泣いて暴れる乳幼児の鼻腔・咽頭の診断、特に中耳炎の診断、鼓膜切開、治療を瞬時に行え有用であるので全世界に広げたい。

第三は従来より絶対治らないとされている内耳性耳鳴に対する挑戦である。20年、30年と続いている耳鳴がひどくなって夜も眠れないという患者さんがかなり多いのであるが、この悩みをどうにかして治したいと、一般的に行われているビタミン剤、ATP大量投与の他に、ステロイドを鼓膜内に注入している。

私の行っている鼓室内デカドロン注入の方法は、デカドロン[®] 2mgをカテラン針を連結したツベルクリン注射筒に入れて2～3分かけてゆっくり注入する。穿刺部位は正円窓に近い部分がよい。

この際、ステロイド液が、少しでも長く中耳腔に止まり正円窓を覆うように耳管を水平にさせるよう下顎（したあご）を挙上（上にあげさせ）させ非注入側を下にして20分くらい臥床させる。めまい、嘔吐が無いので、外来で容易に行える。

私はこの方法を、1週間の間隔で（遠隔地の患者さんは2週間に1回ぐらいとなる）耳鳴りが軽快し、気にならなくなるまで反復して行っている。

この場合、初回注入後、殆ど必ず2、3日間耳鳴りは軽減乃至消失するが、又、再現する事が多い。5、6回で消失する事が多いが、消失しない場合でも回を重ねるとともに、耳鳴りの軽減、消失する期間が長くなり、最終的には耳鳴りが再現しなくなる事が多い。

これは、中耳腔に注入されたステロイド液の一部は、耳管を通過して上咽頭に排出されるにしても残りは鼓索神経叢に作用した後、正円窓を通過して内耳にも入り、毛細胞に作用を及ぼすと思われる。これを繰り返していけば、或る程度の器質的変化を及ぼすのではないかと考える。

結局この方法のメカニズムは中耳腔に注入されたステロイド液は、鼓室粘膜に吸収され、鼓室神経叢に影響を及ぼすとともに一部は正円窓をとおして、内耳の毛細胞にステロイド作用をもたらすものと思われる。これは耳鳴りの起こるメカニズムとしての鼓室神経叢刺激説及び内耳毛細胞異常興奮説を支持するものである。

従来、この方法を試みた発表が2、3あるが必ずしも良結果を得ていない。これは、5～6回の注入で中止しているからであって、私は10回から30回位行なう事によって良好な結果を得ている。優れた抗生剤のある現在、注意深く行えば、かなりな回数を行っても鼓膜損傷、穿孔を残す事はない。現在迄、数百例行っているが、中耳炎を起し、排膿をみたのは1例のみであり、これも旬日で治癒した。この方法も長年の耳鳴りが消えて患者さんから感謝される事が多い。

結局、「心の若さ」ひいては「体の若さ」を維持するのに必要な条件は、自分の治療が世の中に大いに役立っていると思う自身と自尊心であると思う。このような気持ち快的な心理状態で診療にあたれば、最近診療内科でもよく言えわれているように免疫力が高まり、すべてうまく行くと思う。

恩 師 と の 躉 音

江 川 俊 治

恩師はいつまでもどこか怖いものである。これが私共世代の偽らざる思いであろう。入局して間もない頃、先輩と共に鼻中隔矯正術を行なった。術中癒の部分の剥離が難しく慎重に剥離したが小さな穿孔が出来てしまった。この程度は大丈夫と先輩と慰めあいながら除去した鼻中隔軟骨を穿孔部に当て補足して術を終えた。数日後、鼻腔内のタンポンを除去すると辺縁が少し萎縮したためか穿孔が心なしか大きくなったが軟骨はしっかりと当てがわれていた。1週間後に迫った教授回診には表面の形が整い穿孔しないよう唯々祈るばかりであったが、意に反して毎日診るたびに穿孔縁が拡大するような気がし軟骨もぐらついてきた。そっと押してみると老体のようにふらつき助けてやりたいがどうする事もできず軟骨にがんばれと声援をおくるのみである。教授回診は迫って来るし術創は回復せず、憂鬱な毎日であったがグラグラしていた軟骨が周辺の汚物を吸引していた時、突然吸引器の先端に付着し外れてしまった。冷や汗と同時に顔面蒼白、気を取り直し反対側より巻綿子を挿入してみると巻綿子の頭が出てくるのではないか。思案すること1昼夜、現在の教室員には計り知れないと思うが切腹はては甲突川畔に晒し首か、幕末の志士もかくやあらんと意を決して(司馬遼太郎、池波正太郎の愛読者です)教授室を訪ねた。

昭和30年代後半の事であるが当時の教授室は何時でも、誰でも入れる雰囲気では無く教授室の前は常日頃、忍者の如く抜き足、差し足、忍び足で歩いていた。その教授室の扉の縁に縦長の細い案内燈が埋め込んであり、教授室に入る時ブザーを押すと異常に大きな音と共に“お入り下さい”が点燈するが、一瞬の出来事である。この一瞬の点燈を在局中不思議に思っていたが運悪く瞬きと一致すると何時までも点燈しないような気がする。判断に迷い呆然と立っていると教授が足早に出て来られて“何をポート立っとるな”と一喝。逆に点燈した気になって入っても大変である。点燈を確認し教授に経過を報告した。“自動車の運転と同じだよ、少し上手くなった時事故を起こすものだよ”呆然とし切腹か晒し首を覚悟していた私は気合が抜けた。教授が免許をとられたばかり

で暇をみては県内を走り回り時々事故を起こされている事を知っていたが、世の中何が幸いするか判らんものと思い部屋を出ると夕日のせいかな何時もは薄暗い教授室の前が輝いて見えた。

開業以来恩師より礼状その他をいただく度に捨てがたくその数 30 数枚に達した。別に他意はないが捨て難いのである。何時だったかこの事を話した事がある。“君に葉書を書くときは心して書かんといかんな”と呟いておられた。一枚の葉書をいただいた。名前の後に博士殿とある。在局中教授より先生と言われたことのない私にとって博士殿、時には大兄、様とあるのはどうも落ち着きが悪い。恩師御夫妻を食事会にお招きし帰り際、“お世話になりました”と一言、私の心の中にある恩師とイメージが違う。“お世話になりました”では私の頭の中の恩師が許さない。私の描く恩師はいつまでも遠く、高く、仰ぎ見る恩師であって欲しいのだ。座しておられる時は、とても卒寿を迎えられたとは思えない昔ながらの矍鑠とした面影である。然し帰られる後姿は少し淋しげなお年寄りであった。何時までもお元気である事を願いながら見送っている。

人間とは妙なもので苦難の思い出はいつしか甘美の思い出に変わり時々一人静かに昔の辛苦を懐かしんでいる。

Ⅲ. 教室来訪者 (平成13年1月～12月)



9 月	宮崎医科大学耳鼻咽喉科教授	小 宗 静 男
9 月	熊本大学医学部耳鼻咽喉科教授	湯 本 英 二
11 月	島根医科大学耳鼻咽喉科教授	川 内 秀 之

IV. 教室行事 (平成13年1月～12月)



1. 共催の講演会

1. 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室同門会総会・第101回日耳鼻鹿児島県地方部会合同学術講演会 (1月13日)

特別講演：「これからの臨床試験」

茂木 五郎 先生 (大分医科大学附属病院 病院長)

「鼻にみる表情と心」

大山 勝 先生 (鹿児島大学 名誉教授)

2. 第102回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会 (2月8日)

第9回鹿児島アレルギー懇話会

特別講演：「アレルギーと副鼻腔炎－アレルギー性副鼻腔炎の概念－」

鮫島 靖浩 先生 (熊本大学医学部耳鼻咽喉科教授)

「アレルギーとマスト細胞」

罹 智靖 先生 (順天堂大学アトピー疾患研究センター助教授)

「アトピー性脊髄炎とブタ回虫性脊髄炎－新たな脊髄炎の発見－」

吉良 潤一 先生 (九州大学医学部神経内科教授)

3. 第103回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会 (3月8日)

特別講演：「急性期のめまいの診断と治療」

武田 憲昭 先生 (徳島大学医学部耳鼻咽喉科教授)

一般演題：「聴神経腫瘍症例の平衡機能検査成績」

宮之原 郁代 先生 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科)

「最近経験した下眼瞼向き眼振症例と上眼瞼向き眼振症例」

清田 隆二 先生 (今給黎総合病院耳鼻咽喉科)

4. 第26回日耳鼻鹿児島県地方部会総会ならびに第105回学術講演会 (6月17日)

特別講演：「原発不明頸部転移癌」

井之口 昭 先生 (佐賀医科大学耳鼻咽喉科教授)

一般演題：「当科における内視鏡下鼻内前頭洞手術」

下麦哲也，出口浩二，濱崎喜與志，松根彰志，黒野祐一

「当科にて局所粘膜弁再建を行った中咽頭癌症例」

林 多聞，濱崎喜與志，松崎 勉，勝田兼司

「当科における喉頭部分切除手術の成績」

高木 実，西元謙吾，福岩達哉，牛飼雅人，黒野祐一

「当科における鼓室形成術について」

出口浩二，岩元光明，宮之原郁代，黒野祐一

5. 第2回耳鼻咽喉科 鼻の日（8月7日）市民講座（8月4日）

「はなの病気といびき，睡眠時無呼吸」

出口 浩二 先生

6. 第107回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（7月26日）

特別講演：「免疫・アレルギーの臨床と好酸球」－接着分子とケモカイン－

茆原 順一 先生（秋田大学医学部臨床検査医学講座教授）

一般演題：「鼻アレルギーの鑑別疾患」

高木 実 先生

「2001年鹿児島の花粉飛散と花粉症患者動向」

宮之原 郁代 先生

7. 第108回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（8月30日）

特別講演：「鼻アレルギーの治療－減感作療法を中心に－」

大久保 公裕 先生（日本医科大学耳鼻咽喉科助教授）

8. 第109回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（10月4日）

特別講演：「アレルギーと感染症」

榎本 雅夫 先生（日本赤十字社和歌山医療センター

耳鼻咽喉科部長）

9. 第110回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（11月8日）

特別講演：「アレルギー性鼻炎に対する免疫療法」

森山 寛 先生（東京慈恵会医科大学耳鼻咽喉科教授）

一般演題：「スギ花粉症に対する内服治療と減感作療法の臨床的検討」

廣田 常治 先生（ひろた耳鼻咽喉科 院長）

「大学病院における減感作療法の現状」

宮之原 郁代先生

10.第111回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会（11月22日）

特別講演：「上気道と下気道の相関」

須崎 春海 先生（昭和大学医学部耳鼻咽喉科教授）

一般演題：「内視鏡下鼻内副鼻腔手術による嗅覚障害の治療成績」

吉福 孝介 先生（出水市立病院耳鼻咽喉科）

「小児急性中耳炎に対する初期治療の検討」

牛飼 雅人 先生（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

2. 第4回「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」

黒野教授の発案で始められた耳鼻咽喉科桜島フォーラムも今回で4回目を数えることになり、年末のお忙しい時期にもかかわらず多数の先生方にお集まりいただきました。当日は以下のようなプログラムで行われました。

第4回 「耳鼻咽喉科桜島フォーラム」プログラム

平成13年12月6日（木） 19：00～20：30

鹿児島大学医学部 鶴陵会館中ホール

- I. 開会の挨拶 黒野祐一 教授
- II. 症例検討 (Moderator；黒野祐一 教授) Presenter
- 1, 頬部腫脹を来たした幼児の鑑別は？ 永野 広海
 - 2, 頬粘膜の腫瘤病変は何か？ 高木 実
 - 3, 中下咽頭癌症例の喉頭温存の適否は？ 出口 浩二
 - 4, 耳下腺腫瘍はMRI でどこまで診断できるか。 福岩 達哉
- III. 話題提供 (Moderator；松根彰志 助教授)
- 1, 鼻粘膜細胞における接着分子の発現 大堀 純一郎
 - 2, 当科における滲出性中耳炎の取り扱い 牛飼 雅人

前半は診断に苦慮した症例、手術術式の選択や画像診断についてなど臨床上の話題についてディスカッションが行われました。また、後半は話題提供として当教室で現在行っている研究テーマについて紹介するとともに、当科における滲出性中耳炎の取り扱いについてプレゼンテーションさせていただきました。今回も前回同様、スライドを使わずコンピューターをプロジェクターに直接つないでのプレゼンテーションでしたが、昨年と比べてもコンピューターでのプレゼンテーションにだいぶ慣れてきたのではないかと思います。本会は、日頃多くの症例を御紹介いただいている実地医家の先生方の御意見を伺う貴重な場として、今後益々発展させていきたいと考えています。これからも多数の先生方の御参加をお待ちしています。

(文責：牛飼)

3. 第2回 鼻の日 市民講座

日本耳鼻咽喉科学会が呼びかけております「8月7日」の「鼻の日」の一般市民向け企画としまして、「鼻の日 市民講座」を以下の要領で実施いたしました。募集定員約100名いっぱい一般市民の皆様の参加を得て盛況のうちに行うことができました。

テーマ：はなの病気といびき睡眠時無呼吸

日時：平成13年8月4日（土） 13時30分

場所：鹿児島市東千石町 KCプラザホール 7階

13時 受付開始

13時30分 はじめに

鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科教授 黒野祐一 先生

13時15分～45分 はなの病気といびき、睡眠時無呼吸

鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科 出口浩二 先生

(15分間 質問コーナー)

14時～14時30分 呼吸器内科領域から見た睡眠時無呼吸症候群

鹿児島大学医学部内科学第三 川畑政治 先生

(15分間 質問コーナー)

14時45分～15時15分 睡眠障害 ～精神科の視点～

鹿児島大学医学部神経精神科 内田将博 先生

(15分間 質問コーナー)

15時30分 治療用器械展示／説明 在宅酸素療法

協力 バイタルエア ジャパン(株)

16時 終了

昨年は、第1回「アレルギー性鼻炎、花粉症とその対策」を行いました。そして、今年も昨年同様、教室の主催とし、教室同門会と日耳鼻鹿児島県地方部会による後援というスタイルをとらせていただきました。教室内外の諸先生方には、宣伝、当日の運営等多々御協力いただき誠に有難うございました。

(市民講座 事務局 松根彰志)



平成14年 鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科学教室同門会

平成14年1月19日（土）鹿児島県医師会会館において、同門会役員会、総会ならびに日耳鼻鹿児島県地方部会との合同の学術講演会を開催いたしました。その後、新年会も兼ねた、同門会・地方部会合同の会員懇親会が行われました。

総会では、黒野会長によります開会宣言と挨拶の後、物故会員のご冥福をお祈りして出席者全員によります黙祷が行われました。以後、会長によります司会で議事が進行されました。事務局より、平成13年の一般会計および事業報告、さらに黒野教授就任3周年記念事業（平成13年1月13日）関連の特別会計の報告が行われ、監事からの監査報告後承認されました。続いて、平成14年の予算案並びに事業計画の提案が行われ承認されました。今回の議事内容でもっとも特徴的なことは、平成15年2月20、21、22日に当教室が主催する第21回日耳鼻免疫アレルギー学会の寄付関連の提案や質疑が中心であったことです。同年には、九州ブロック連合地方部会や日韓台7大学耳鼻咽喉科カンファレンスの主催も行うことになっています。これら3つすべてを成功のうちに開催するには、財政面をしっかりとさせることは避けて通れない重要な問題です。今回、財団法人国際耳鼻咽喉科学振興会（SPIO）の御指導、御援助を得て、各方面からの寄付が円滑かつ公正に行われる予定であることを報告し承認されました。

総会終了後、記念撮影が行われ、以下の内容で、地方部会との合同による学術講演会／一般演題ならびに特別講演が開催されました。

学術講演会

一般演題

座長 松崎 勉 先生（国立病院九州循環器病センター耳鼻咽喉科）

1. 当科で経験したツツガムシ病の診断と治療

永野広海（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

2. ラリンゴマイクロサージェリーにおけるXPSドリルの使用経験

福岩達哉（鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科）

座長 花牟礼 豊 先生（鹿児島市立病院耳鼻咽喉科）

3. 舌下腺摘出術にて治療した顎下型がま腫 5 症例

林 多聞 (国立病院九州循環器病センター耳鼻咽喉科)

4. 当科における内視鏡下前頭洞手術例の報告

田中紀充 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科)

5. 耳音響放射検査 (OAE) の実施経験と臨床的意義

岩坪哲治 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科)

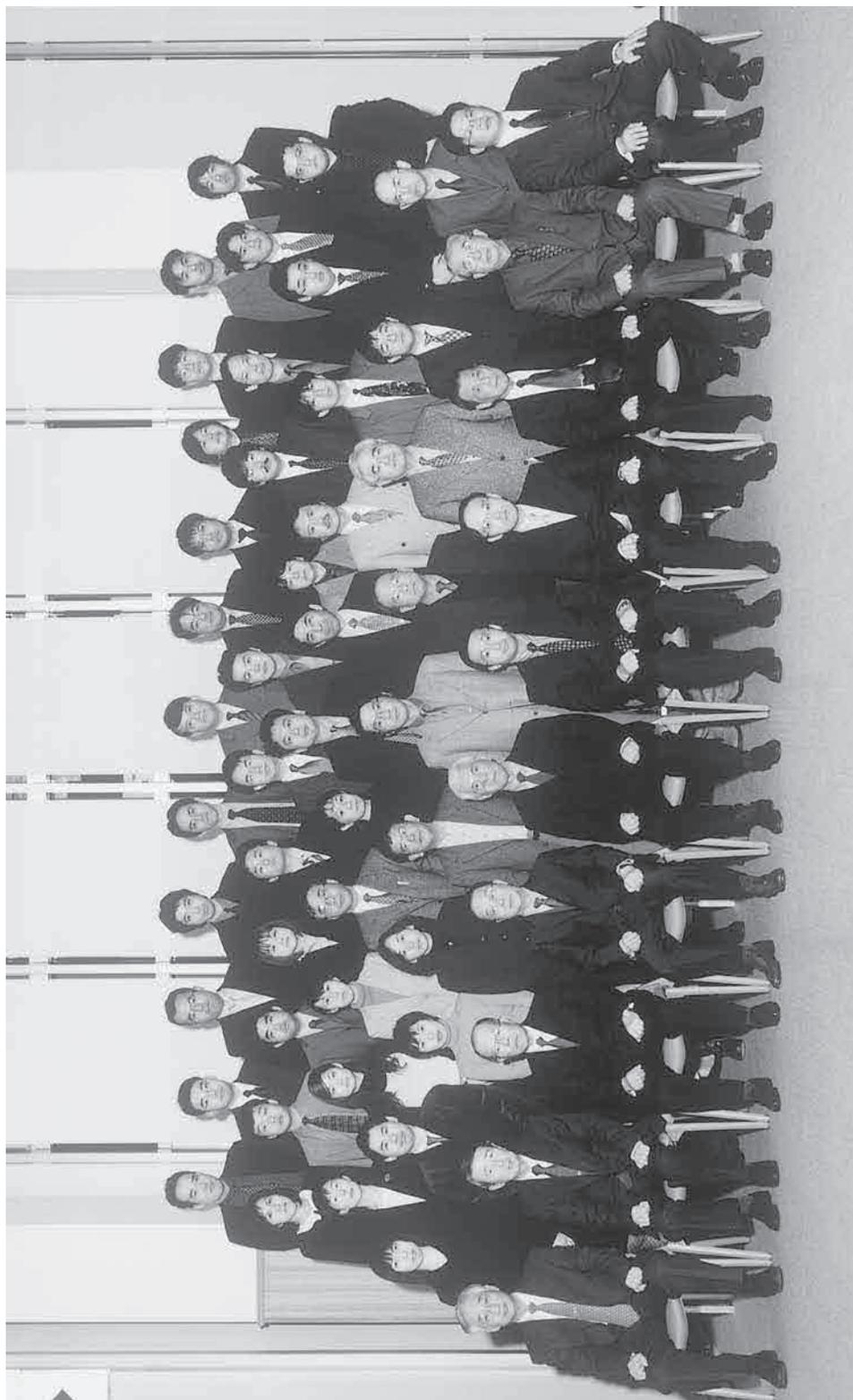
特別講演

座長 黒野祐一 先生 (鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科教授)

宇宙医学と前庭系 — スペースシャトルで行った実験結果をもとに —

肥塚 泉 先生 (聖マリアンナ医科大学耳鼻咽喉科学教授)

(文責：同門会事務局 松根彰志)



鹿児島大学耳鼻咽喉科学教室同門会総会 平成14年1月19日 於：鹿児島県医師会館

1. 巡回診療（県医務課）

- 三島村（7月10日～7月14日）
- 下甌村（9月25日～9月27日）
- 上甌村（12月4日～12月6日）
- 十島村（6月28日～7月3日）
- 十島村（10月7日～10月12日）

2. 身体障害者巡回診療

- 1月 長島町，福山町
- 2月 大浦町，上屋久町，屋久町
- 3月 佐多町，鶴田町
- 4月 有明町
- 5月 川辺町，十島村
- 6月 末吉町，喜入町，三島村（竹島）
- 7月 大根占町，国分市，下甌村，鹿島村
- 8月 吹上町，笠利町，大和村，龍郷町
- 9月 大崎町，喜界町
- 10月 樋脇町，牧園町，宇検村，瀬戸内町，住用村
- 11月 鹿屋市，川内市
- 12月 大口市，知覧町

3. 学校保健（統計報告）

鹿児島大学耳鼻咽喉科において平成13年度に実施された鹿児島県下の耳鼻咽喉科学校検診は平成13年4月から11月にかけて行われた。その検診結果を集計し、疾患別、部位別等で解析した。

〈対象〉

本年度検診の行われた地域は鹿児島市，垂水市，阿久根市，西之表市，末吉町，大崎町，輝北町，屋久町，財部町，伊仙町，南種子町，穎娃町，上甌村，下甌村，和泊町，志布志町，有明町の17市町村で，受診者総数は14,717人であった。対象疾患は耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻中隔湾曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎，慢性扁桃炎，扁桃肥大，その他であった。

〈結果〉

個々の疾患における全受診者の有病率を見ると（図1），例年と同様に鼻アレルギーが圧倒的に多い。次に慢性副鼻腔炎，耳垢栓塞の順であった。図2，図3は鼻疾患と，耳疾患における学年別の有病率を比較したものであるが，鼻疾患については学年による大きな変化は見られなかった。耳疾患については，学年が上がるにつれて低下傾向を示した。

図1

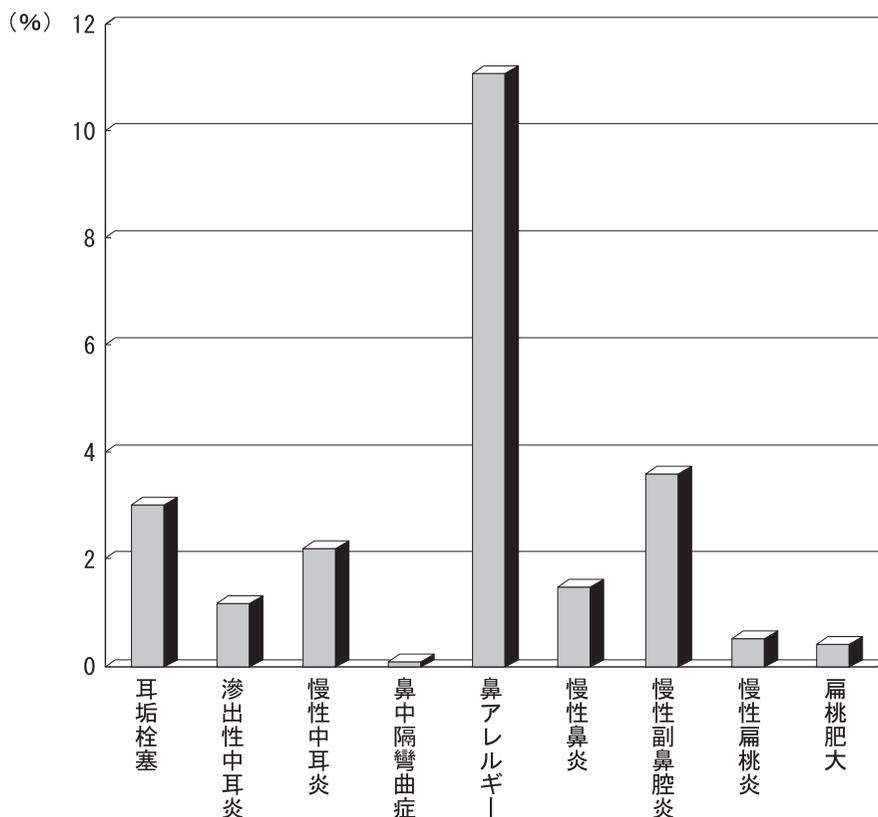


図 2

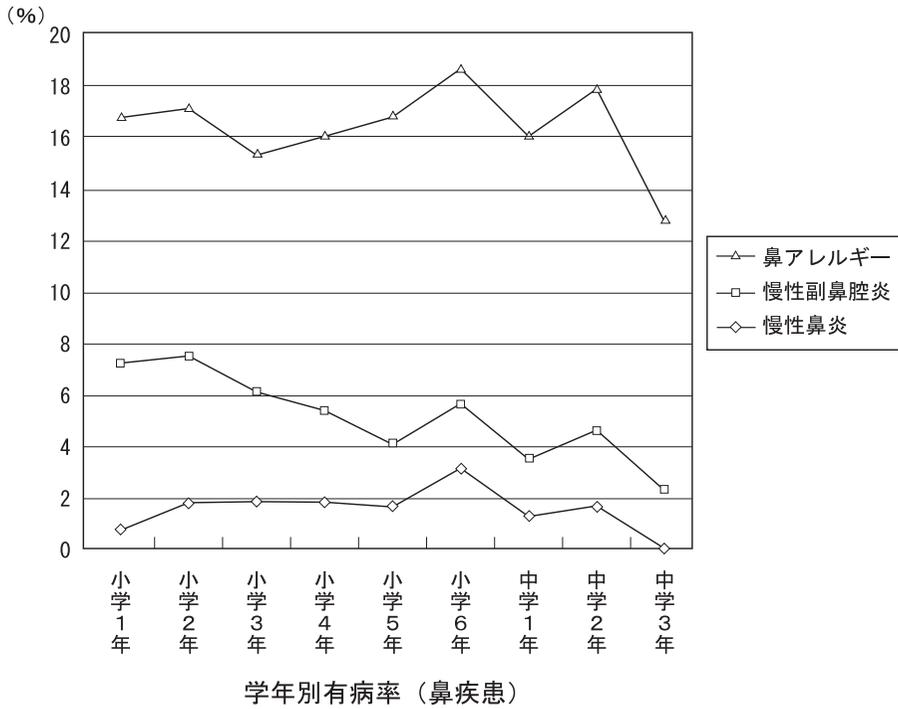
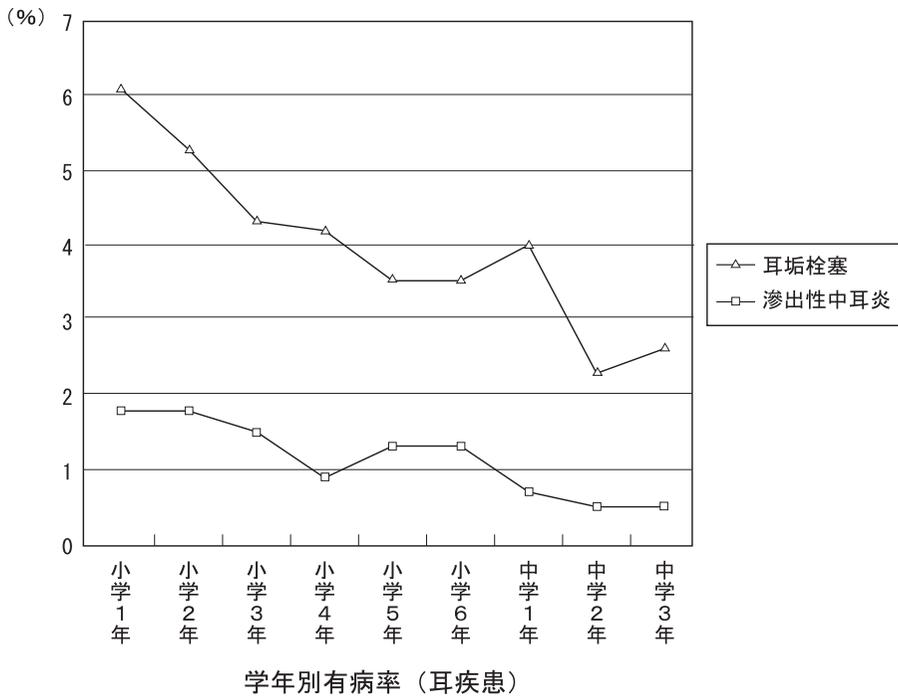


図 3



〈考察〉

平成13年度の学校検診の集計結果をまとめると、例年通り学年によらず鼻アレルギーの有病率が有意に高かった。有病率も11%程度であり例年と同程度であった。今後も注意深い観察の必要がある。また耳疾患については学年が上がるにつれて低下傾向を示しているが、これもほぼ例年通りであった。以上のような結果であるが、この結果を踏まえて今後も各疾患の有病率の推移を観察し、学校保健、学校教育に役立てていく必要がある。

1. アレルギー外来（毎週月曜日午後2時～4時，要予約）

1) 概要

当科における鼻アレルギーの診断・治療の流れは，前号のさくらじまでお示したとおりです。昨年のアレルギー外来新患総数は164例で，うち鼻アレルギー診療ガイドラインに沿って，鼻アレルギーと診断されたのは101例でした。個々の症例の病型・重症度・副鼻腔炎や中耳炎の合併の有無・社会的背景を考慮し治療法の選択を行っています。特に免疫療法については，以下2)に沿って行っています。また2001年は，3月と5月に，日本アレルギー協会九州支部の患者調査の一環として，それぞれの時期におけるアレルギー患者動向を調査しましたのでその結果をご紹介します。

2) 免疫療法

当科では，

適応)

- ⊕通年性鼻アレルギー
- ⊕スギ花粉症
- ⊕他の花粉抗原の関与が低いもの。
- ⊕中等症以上
- ⊕治療について十分なインフォームドコンセントが得られる。

実施法)

- ①初回注射量は，反応域値濃度かその1/10にする。
- ②基本的に50%増量法。
- ③注射部位は揉まない。
- ④体調が悪いときは行わない。
- ⑤維持量は，100倍0.2ml を目標にする。

を基本に行っています。

少しずつですが，この治療を選択する患者さんも増えてきました。

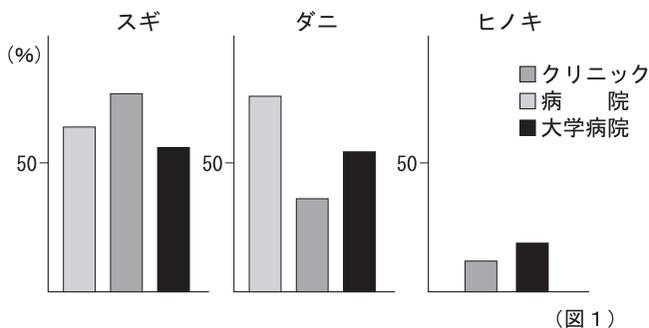
3) アレルギー患者動向調査

鹿児島県内では、大学病院と、川内済生会病院、せんだい耳鼻咽喉科で患者さんの協力を得て3施設で行いました。調査は3月、5月のうち、それぞれ1週間を限定し患者動向を調べました。3月は508名（男性212名、女性296名）、5月は102名（男性54名、女性48名）の受診がありました。3月は、女性患者の受診が多い傾向にありましたが、これは、スギ花粉症の女性の受診が多かったためです。この時期は、鼻アレルギーで耳鼻科を受診する患者の50%強がスギ花粉症患者といえます。ヒノキ花粉陽性率は、13～22%でした（図1）。また、5月は、カモガヤ花粉陽性率が、22～30%でみられました（図2）。通年性アレルギーに合併する例がみられ、この時期、カモガヤ花粉症が通年性鼻アレルギーの増悪因子となることが推測されました。

（文責：宮之原 郁代）

3月アレルギー性鼻炎患者動向

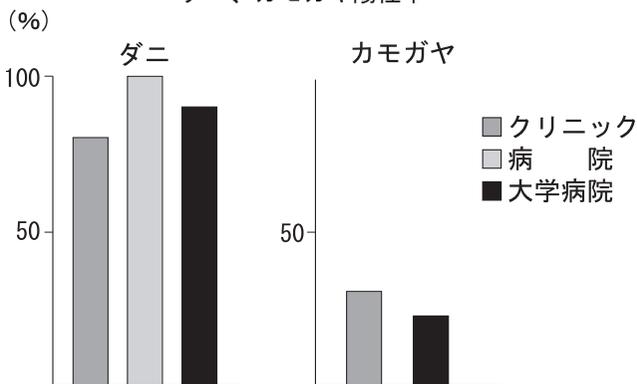
～スギ、ダニ、ヒノキ陽性率～



(図1)

5月アレルギー性鼻炎患者動向

～ダニ、カモガヤ陽性率～



(図2)

2. 中耳炎外来

黒野教授の赴任以来、毎週火曜日の午前中を中心に中耳炎外来として、滲出性中耳炎や急性中耳炎症例の診療を行っています。小児急性中耳炎の軽症の症例に対しては初診時には抗生剤の投与を行わず、鎮痛剤の投与のみを対症的に行い、3日後の再診時に改善傾向にあればそのまま抗生剤の投与は行わずに対照的に経過を見る治療プロトコルを用いています。この治療成績については、昨年耳鼻咽喉科感染症学会において発表しましたが、小児急性中耳炎の軽症例の約7割は抗生剤の投与がなくとも治癒するようです。ただ大学病院の性格上、急性中耳炎症例の多くは夜間急患で受診する症例で、既に抗生剤を投与されている例も多く、このプロトコルにエントリー出来る症例は限られているためなかなか症例が増えないのが相変らずの悩みです。また、滲出性中耳炎についても、なかなか症例が増えないのが相変らずの悩みとなっています。滲出性中耳炎の難治例等ありましたら、当科へ御紹介をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

(文責：牛飼)

3. 副鼻腔炎外来

内視鏡下鼻内副鼻腔手術(ESS)が当科で本格的に行われるようになってほぼ10年になります。また、本誌(1995年の第9号)に第1回の「副鼻腔炎外来」が掲載されて以来今回で8回目となります。この間のトピックスを列記すると、(1)副鼻腔炎手術への内視鏡の導入と一般化、(2)マクロライド少量長期投与、(3)YAMIK副鼻腔炎治療用カテーテルの治験と認可、(4)副鼻腔気管支症候群、(5)鼻副鼻腔炎と嗅覚、(6)アレルギー性副鼻腔炎、そして最近の(7)好酸球性副鼻腔炎があげられます。これらは、いずれも最近の副鼻腔炎病態の解決すべき重要な問題点ともいえます。

初期の頃の「副鼻腔炎外来」では、従来から症例数も最も多い、感染型、化膿型の副鼻腔炎を中心に見ていましたが、これらの術後の治療経過は順調であることが次第に明らかとなってきています。当科以外の施設でもESSが導入されるに従い、当科における副鼻腔炎手術例の中で、従来からの通常の感染型、化膿型の副鼻腔炎例が数の点では依然一番多いですが、他施設での再発例やアスピリン喘息を含む喘息合併症(の紹介例)といったいわゆる「難治例」がめだつ傾向にあります。

アレルギー性副鼻腔炎の病態の議論が盛んに行われるようになり、アレルギー性鼻炎例で副鼻腔陰影を有する例を積極的に取り上げる作業を進めていました時に、喘息の合

併例で難治性の例で、局所や末梢血に好酸球増多を認めるものが大変気になっていました。この一群が結局は、基本的にI型アレルギーとは必ずしも関連しない、しかも局所や全身的な反応として好酸球の増多や浸潤を強く認める「好酸球性副鼻腔炎」でありました。感染型、成人発症型の喘息を伴うことが多く、中には好酸球性中耳炎を合併して症状の沈静化にてこずっている例もあります。全国的にも今大変話題になっていますが、現時点で確立された定義も無く、その病態研究、ステロイドも含めた治療指針の検討が急務だと思われます。

これまでの当科でのESS例の治療成績を一度まとめる必要性を感じていましたが、未だ実効されておらず、EBMに関する情報、データの整備が必要とされている昨今、是非早急に実行したいと考えています。そして、その中でアレルギー性鼻炎の合併例や、「好酸球性副鼻腔炎」の占める割合や、治療経過の特徴や問題点を明らかにしていきたいと思います。

(文責 松根彰志)

4. 頭頸部腫瘍外来

毎週木曜日の午前中に行っている頭頸部腫瘍外来は、あいも変わらず盛況です(あまり盛況過ぎるのもなんですが)。毎週、頭頸部悪性腫瘍の治療後の患者さんの、再発、転移といった疾患的なものだけでなく、機能的な面や、精神的な面を含めて経過観察するため、現在はなるべく入院時に担当だったドクターが診察にあたっています。しかし、大学の宿命でドクターの転勤などがあるとその引き継ぎや患者さんへの連絡などが大変です。それでも決して多くないスタッフで頭頸部腫瘍外来をまわしていますが、最近の頭頸部悪性腫瘍の患者で気がついたことがあります。

- 1) 全身合併症を持つ患者さんが多くなった：腫瘍患者の高齢化もあり、高血圧などの循環器疾患、糖尿病、脳血管障害、呼吸器疾患、腎疾患、肝疾患などさまざまな全身合併症を持つ患者さんが多く受診し、術後の管理が難しくなっているように思います。
- 2) 重複癌を合併している患者が多くなった：特に中咽頭、下咽頭の患者さんに多く、食道癌、肺癌、頭頸部領域の他の癌などが見られ、治療をさらに難しくしています。実際、下咽頭癌では去年1年間で、咽頭喉頭頸部食道全摘術、遊離食道による再建

術は1例も行われず，そのかわり咽頭喉頭とともに食道全摘出術，胃管による再建術（スーパーチャージ）が換わりに行われています。

- 3) 治療後5年，10年経った患者から再発を認めるようになった：これも最近の傾向ですが，昔から頭頸部腫瘍外来に通ってきている患者さんで再発や新たな癌が発生した方がいらっしゃいました。それこそ，私が入局する前からの頭頸部腫瘍外来の常連さんが再発することも多々ありました。その中には放射線誘導癌が疑われる症例などもあり，たとえ5年，10年経過している症例でも，注意を怠らないことが必要だと再認識しました。

頭頸部腫瘍外来のスタッフもさらに若返ります。頭頸部悪性腫瘍の治療の難しさをまだまだ理解していないところもありますので，開業の先生を含め，多方面からの御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（文責：西元）

総施行件数 612件（病棟396件，外来216件）

担当 下麥 哲也

1) 悪性腫瘍（施行件数 149件）

喉頭腫瘍 34

SCC (31)

その他 (3)

甲状腺腫瘍 15

papillary carcinoma (12)

follicular carcinoma (1)

medullary carcinoma (1)

plasmacytoma (1)

上咽頭腫瘍 4

SCC (2)

undifferentiated carcinoma (1)

その他 (1)

中咽頭腫瘍 15

SCC (13)

undifferentiated carcinoma (1)

malignant lymphoma

(non-Hodgkin) (1)

下咽頭腫瘍 8

SCC (8)

上顎洞腫瘍 2

SCC (2)

篩骨洞腫瘍 1

adenocarcinoma (1)

鼻腔腫瘍 11

adenoid cystic carcinoma (3)

malignant lymphoma

(non-Hodgkin) (2)

malignant melanoma (1)

AILD type T-cell lymphoma (1)

undifferentiated carcinoma (1)

adenocarcinoma (1)

rhabdomyosarcoma (1)

耳下腺腫瘍 4

SCC (1)

adenocarcinoma (1)

myoepithelial cell tumor (1)

その他 (1)

扁桃腫瘍 1

malignant lymphoma

(non-Hodgkin) (1)

舌腫瘍 14	(non-Hodgkin) (2)
S C C (10)	sebaceous carcinoma (1)
verrucous carcinoma (1)	S C C (1)
その他 (3)	
	外耳道腫瘍 3
舌根部腫瘍 1	Basal cell carcinoma (2)
S C C (1)	S C C (1)
	2) 良性腫瘍 (施行件数 61件)
歯肉腫瘍 3	喉頭腫瘍 1
S C C (1)	squamous papilloma (1)
adenocarcinoma (1)	
その他 (1)	
	甲状腺腫瘍 3
硬口蓋腫瘍 1	follicular adenoma (2)
S C C (1)	adenomatous goitor (1)
	中喉頭腫瘍 3
口腔底腫瘍 5	squamous papilloma (1)
S C C (4)	papilloma (1)
undifferentiated carcinoma (1)	neurinoma (1)
	下咽頭腫瘍 1
口腔腫瘍 2	squamous papilloma (1)
S C C (2)	
	上顎腫瘍 6
頬粘膜腫瘍 1	S C C (3)
S C C (1)	adenocarcinoma (2)
	malignant fibrous histiocytoma (1)
頸部腫瘍 8	顔面腫瘍 1
undifferentiated carcinoma (2)	malignant lymphoma
papillary carcinoma (2)	
malignant lymphoma	

(non-Hodgkin) (1)	hemangioma (1)
皮膚腫瘍 3	顎下腺腫瘍 4
S C C (2)	pleomorphic adenoma (4)
その他 (1)	
転移性腫瘍 1	舌腫瘍 1
papillary carcinoma (1)	lymphangioma (1)
原発不明癌 2	3) 嚢胞性疾患
S C C (2)	Thyroglossal duct cyst (3)
	lymphoepithelial cyst (3)
その他 3	Ranula (2)
	4) その他
上顎洞腫瘍 1	cholesteatoma (12)
capillary hemangioma (1)	Sjogren syndrome (10)
	leukoplasia (3)
篩骨洞腫瘍 1	
鼻腔腫瘍 10	頸部腫瘍 1
inverted papilloma (3)	neurilemmoma (1)
hemangioma (2)	
squamous papilloma (1)	中耳腫瘍 1
papilloma (1)	adenoma (1)
pleomorphic adenoma (1)	
その他 (2)	その他 17
	epidermal cyst (1)
耳下腺腫瘍 17	branchial cyst (1)
Warthin tumor (14)	fistula (1)
pleomorphic adenoma (2)	

文部科学省科学研究費（平成13年12月現在）

基盤研究（B）(2)

上気道感染症予防ワクチンの開発とその粘膜免疫応答に関する基礎的研究

代表者 黒野祐一

分担者 松根彰志 牛飼雅人 宮之原郁代 出口浩二

基盤研究（C）(2)

鼻副鼻腔炎粘膜における血管増殖制御機構に関する基礎的研究

——難治性慢性気道炎の病態解明と治療をめざして——

代表者 松根彰志

分担者 黒野祐一 牛飼雅人 宮之原郁代 出口浩二

基盤研究（C）(2)

組換え抗原を用いたインフルエンザ菌に対する経鼻粘膜ワクチンの開発・研究

代表者 福岩達哉

分担者 黒野祐一

奨励研究（A）

鼻粘膜上皮細胞の分化機構ならびに細胞間情報伝達に関する生物化学的研究

代表者 出口浩二

特定領域研究（A）

環太平洋地域におけるがんの要因探索

代表者 秋葉澄伯

分担者 愛甲 孝 栄鶴義人 黒野祐一 郡山千早 伊藤哲彦 大谷文雄

1. 原 著

- (1) 松根彰志, 宮之原郁代, 大城 浩, 牛飼雅人, 黒野祐一, 松尾克彦: 低酸素, リポ多糖刺激による鼻茸線維芽細胞からの血管内皮細胞増殖因子とケモカイン産生, 日本鼻科学会会誌, 40(1): 16-19, 2001
- (2) 宮之原郁代, 牛飼雅人, 福岩達哉, 出口浩二, 黒野祐一: 両側扁桃周囲膿瘍の一例, 日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌, 19(1): 1-3, 2001
- (3) 松根彰志, 宮之原郁代, 大城 浩, 牛飼雅人, 黒野祐一, 松尾克彦: 低酸素下 LPS 刺激による鼻茸線維芽細胞の VEGF とケモカイン, 日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌, 19(1): 105-108, 2001
- (4) 福岩達哉, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 松根彰志, 黒野祐一: 原発性免疫不全症を合併したペニシリン耐性肺炎球菌による小児反復性急性乳様突起炎の 1 例, 日本耳鼻咽喉科学会会誌, 104: 1089-1092, 2001
- (5) D.Seki, K.Ueno, Y.Kurono, Y.Eizuru: Clinicopathological features of Epstein-Barr virus-associated nasal T/NK cell Lymphomas in southern Japan. Auris Nasus Larynx.28: 61-70, 2001

2. 総 説

- (1) 黒野祐一: 臨床医の基礎研究, 耳鼻免疫アレルギー (JJIAO) 19(1): 21-23, 2001
- (2) 松根彰志: YAMIK による洗浄法 (手術のコツシリーズ 鼻編①副鼻腔洗浄) JOHNS, 17(2): 257-260, 2001
- (3) 松根彰志: 鼻粘膜線維芽細胞における血管内皮細胞増殖因子とケモカインの産生と低酸素, エンドトキシンの影響, アレルギー科, 12(4): 377-380, 2001
- (4) 黒野祐一: 経鼻ワクチン開発へ向けて-最新の展開, 炎症と免疫, 9(6): 18-23, 2001
- (5) 福山 聡, 清野 宏: 呼吸器粘膜免疫システムのユニーク性: NALT 形成における組織構成サイトカインネットワーク, 炎症と免疫, 9(6): 3-9, 2001
- (6) 黒野祐一: 感染症の画像診断-耳鼻咽喉科- ANTIBIOTICS&CHEMOTHERAPY 17(9): 1569-1576, 2001
- (7) 松根彰志: 高齢者の慢性副鼻腔炎, MB ENT, 7: 33-38, 2001 7
- (8) 黒野祐一: 鼻における局所免疫応答, 免疫・アレルギー疾患, 18: 9-16, 2001
- (9) 黒野祐一: 私と粘膜免疫, 耳鼻免疫アレルギー (JJIAO), 19(4): 33-35, 2001

3. その他

出口浩二

紙上診察室「のどの異和感」
南日本新聞，2001年5月9日

鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科外来
くらしワイド 怖い「無呼吸症候群」
南日本新聞，2001年5月23日

宮之原郁代

紙上診察室「めまい」
南日本新聞，2001年9月12日

牛飼雅人

紙上診察室「耳管開放症」
南日本新聞，2001年10月10日

松根彰志

紙上診察室「嗅覚障害」
南日本新聞，2001年11月7日

松根彰志

「健康相談室 Q&A 副鼻腔炎の治療について」
月刊ヘルスアンド2 ライフ（健康保険組合発行）

4. 国内学会発表

(1) 特別講演

メディカルセミナーin東海－変わりゆく抗生物質－ 1月27日（名古屋）
「滲出性中耳炎の病態と治療」
黒野祐一

出水郡内科医会学術講演会 1月30日
「アレルギーの病態とアレルギー性副鼻腔炎」
松根彰志

日本耳鼻咽喉科学会神奈川県地方部会 2月1日 (神奈川)
「鼻アレルギーの臨床」
黒野祐一

浜松市医師会学術講演会 2月7日 (浜松)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

宮崎医科大学講義 2月9日 (宮崎)
「免疫アレルギー」
黒野祐一

第一回 東海アレルギーフォーラム 2月10日 (名古屋)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

大口・伊佐医師会生涯教育講演会 2月22日
「最近の鼻・副鼻腔炎の治療」
松根彰志

第6回 奈良県鼻副鼻腔研究会 2月24日 (奈良)
「上気道におけるアレルギー性炎症-病態と治療-」
黒野祐一

北北海道耳鼻咽喉科懇話会 3月3日 (北海道)
「上気道におけるアレルギー性炎症」
黒野祐一

長崎県アレルギー講習会 3月7日 (佐世保)
「アレルギー性鼻炎における副鼻腔陰影」
松根彰志

アレルギー研修会2001「アレルギー治療の最前線」 4月12日 (鹿児島)
～ガイドラインに沿った診断と治療～
「アレルギー性鼻炎・花粉症診療の実際」
黒野祐一

熊本大学講義 5月23日 (熊本)

「粘膜免疫」

黒野祐一

松山耳鼻咽喉科会学術講演会 5月24日 (松山)

「上気道粘膜免疫とアレルギー」

黒野祐一

島根医科大学講義 5月29日 (出雲)

「中耳炎に関する最新の話」

黒野祐一

第126回 福岡アレルギー研究会 8月17日 (福岡)

「アレルギー性副鼻腔炎の病態と治療」

松根彰志

熊本県地方部会学術講演会 11月14日 (熊本)

「鼻副鼻腔炎の病態と発症機序～アレルギー性炎症の関与～」

黒野祐一

第62回 耳鼻科カンファランス 12月13日 (佐賀)

「内視鏡下鼻内手術の基本的な手技」

黒野祐一

大分医科大学講義 12月18日 (大分)

「鼻副鼻腔の解剖生理・副鼻腔炎」

黒野祐一

(2) シンポジウム

第19回 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 2月22日～23日 (大阪)

「NALTの抗原認識における特異性」

福山 聡

6th Asian Research Symposium in Rhinology

「Hypoxia in the mucosal pathology of paranasal sinuses」

Y. kurono

第21回 気道分泌研究会 6月2日 (東京)
「慢性副鼻腔炎の新たな要因 –低酸素の関与について–」
松根彰志, 宮之原郁代, 孫 東, 牛飼雅人, 黒野祐一

(3) 一般

第11回 日本頭頸部外科学会 1月26日~27日 (横浜)
「内側型眼窩吹き抜け骨折におけるシリコンシート固定」
林 多聞, 松根彰志, 高木 実, 黒野祐一
「鼻性頭蓋内合併症の3症例」
積山幸裕, 花牟礼豊, 笹野藤彦, 鹿島直子

第13回 気道病態シンポジウム 1月20日 (東京)
「鼻粘膜血管内皮細胞における細胞接着分子発現」
大堀純一郎, 高木 実, 牛飼雅人, 黒野祐一

IVth ISBAAR: 第4回 アレルギー性鼻炎の基礎と臨床に関する国際シンポジウム
2月10日~11日 (東京)
「Effect of Cetirizine on NF- κ B Activation and Expression of Adhesion Molecules in Cultured Human Endothelial Cells」
J.Ohori, M.Ushikai, S.Matsune and Y.Kurono

第23回 鹿児島感染症研究会 2月15日 (鹿児島)
「両側扁桃周囲膿瘍の1例」
宮之原郁代, 牛飼雅人, 福岩達哉, 出口浩二, 黒野祐一

第19回 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会 2月22日~23日 (大阪)
「低酸素下 LPS 刺激による VEGF とケモカイン」
松根彰志, 松尾克彦, 宮之原郁代, 牛飼雅人, 黒野祐一
「組み換え抗原を用いたインフルエンザ菌に対する経鼻粘膜免疫応答」
福岩達哉, 福山 聡, 田中紀充, Yoshikazu Yuki, 黒野祐一
「ヒト鼻粘膜由来培養上皮および線維芽細胞における NF- κ B の活性化と炎症性サイトカインの発現」
高木 実, 牛飼雅人, 大堀純一郎, 宮之原利男, 黒野祐一
「鼻粘膜血管内皮細胞および好酸球における細胞接着分子発現」
大堀純一郎, 松根彰志, 牛飼雅人, 黒野祐一

平成13年 頭頸部腫瘍合同セミナー 3月5日 (鹿児島)
「頭頸部腫瘍に対するサイバーナイフの治療経験」
福岩達哉, 出口浩二, 西元謙吾, 岩元光明, 齊藤研一, 黒野祐一

第32回 日本喉頭科学会 3月16日~17日 (滋賀)
「喉頭真菌症の1例」
大堀純一郎, 西元謙吾, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 黒野祐一
「Ejnell法による声門開大術の経験」
唐木敦子, 福岩達哉, 西元謙吾, 出口浩二, 黒野祐一

第28回 日耳鼻南九州合同地方部会 4月14日 (熊本)
第104回 鹿児島県地方部会学術講演会
「頭蓋内へ進展したコレステリン肉芽腫のI症例」
岩元光明, 松根彰志, 黒野祐一
「血管原性腫瘍が疑われた上顎洞癌症例」
吉福孝介, 岩下睦郎, 松根彰志, 黒野祐一
「ナビゲーションシステムを用いた内視鏡下鼻内副鼻腔手術の経験」
田中紀充, 松根彰志, 福岩達哉, 岩坪哲治, 林 多聞, 黒野祐一
「Ejnell法による声門開大術の経験」
唐木敦子, 福岩達哉, 西元謙吾, 出口浩二, 黒野祐一
「当科における扁桃細菌叢の検討」
大堀純一郎, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 松根彰志, 黒野祐一

第13回 日本アレルギー学会春季臨床大会 5月10日~12日 (横浜)
「局所及び全身性の好酸球増多を伴った慢性副鼻腔炎の一例」
田中紀充, 西元謙吾, 松根彰志, 黒野祐一

第102回 日本耳鼻咽喉科学会総会 5月17日~19日 (福岡)
「鼻腔内に発生した鼻咽腔血管線維腫の2例」
岩元光明, 唐木敦子, 吉福孝介, 松根彰志, 黒野祐一
「頭頸部腫瘍に対するサイバーナイフ治療の経験」
福岩達哉, 岩元光明, 西元謙吾, 出口浩二, 齊藤研一, 黒野祐一
「インフルエンザ菌組み換え抗原に対する鼻粘膜免疫応答」
田中紀充, 福岩達哉, 福山 聡, Yoshikazu Yuki, 黒野祐一

第25回 日本頭頸部腫瘍学会 第22回頭頸部手術手技研究会 6月20日~22日
(北海道)
「同一病巣内で異なる組織型を示し治療に苦慮した声門上喉頭癌症例」
福岩達哉, 西元謙吾, 牛飼雅人, 後藤正道, 黒野祐一

「軟口蓋全欠損をきたした硬口蓋悪性腫瘍症例」

西元謙吾, 岩元光明, 唐木敦子, 黒野祐一

「当科にての根治的頸部郭清術例における術前評価と摘出標本の組織学的関連について」

濱崎喜與志, 西元謙吾, 林 多聞, 黒野祐一

第63回 耳鼻咽喉科臨床学会 6月29日～30日 (沖縄)

「頭蓋内へ進展したコレステリン肉芽腫の1例」

岩元光明, 松根彰志, 黒野祐一

「ナビゲーションシステムを用いた内視鏡下鼻内副鼻腔手術の経験」

田中紀充, 松根彰志, 福岩達哉, 岩坪哲治, 林 多聞, 黒野祐一

第1回 鹿児島めまい研究会 7月5日 (鹿児島)

「浮遊耳石置換法で改善した良性発作性頭位眩暈症の一例」

宮之原郁代, 牛飼雅人, 唐木敦子, 黒野祐一

第8回 マクロライド新作用研究会 7月13日～14日 (東京)

「鼻粘膜由来培養細胞におけるサイトカイン発現およびNF- κ B活性化に対するクラリスロマイシンの影響」

牛飼雅人, 高木 実, 大堀純一郎, 宮之原利男, 黒野祐一

日本耳鼻咽喉科学会第16回九州連合地方部会学術講演会

第106回 鹿児島県地方部会学術講演会 7月13日～15日 (長崎)

「硬口蓋全欠損をきたした硬口蓋悪性腫瘍症例」

西元謙吾, 岩元光明, 唐木敦子, 黒野祐一

「聴神経腫瘍症例の平衡機能検査成績」

岩坪哲治, 宮之原郁代, 下麦哲也, 田中紀充, 大堀純一郎, 黒野祐一

「局所及び全身性好酸球増多を伴った副鼻腔炎の1例」

田中紀充, 西元謙吾, 松根彰志, 黒野祐一

第31回 日本耳鼻咽喉科感染症研究会, 第25回日本医用エアロゾル研究会

9月7日 (和歌山)

「当科における扁桃細菌叢の検討」

大堀純一郎, 牛飼雅人, 宮之原郁代, 黒野祐一

第14回 日本口腔咽頭科学会学術講演会 9月13日～15日 (東京)

「硬口蓋全欠損をきたした硬口蓋悪性腫瘍症例」

西元謙吾, 岩元光明, 唐木敦子, 森田康彦, 西 恭宏, 黒野祐一

「乳児に発症した睡眠時無呼吸症候群のI症例」

下麦哲也, 大堀純一郎, 松根彰志, 黒野祐一

「病巣感染に対する口蓋扁桃摘出術の効果」

田中紀充, 黒野祐一

第40回 日本鼻科学会 9月27日～29日 (栃木)

「ヒト培養線維芽細胞からの VEGF 産生の制御」

松根彰志, 孫 東, 歐 俊巖, 田中紀充, 牛飼雅人, 黒野祐一

「頭蓋内へ進展した巨大な多発性前頭洞嚢胞の 1 例」

出口浩二, 濱崎喜與志, 岩下睦郎, 黒野祐一

「アレルギー性鼻炎を合併した慢性副鼻腔炎の上顎洞粘膜所見」

森園健介, 松根彰志, 宮之原郁代, 黒野祐一

第11回 日本耳科学会学術講演会 10月11日～13日 (神戸)

「当科における鼓室形成術 III 型変法および IV 型変法の術後成績について」

出口浩二, 宮之原郁代, 黒野祐一

「顔面神経麻痺を合併した乳幼児急性中耳炎の 2 例」

田中紀充, 福岩達哉, 宮之原郁代, 黒野祐一

第53回 日本気管食道科学会 11月29日～30日 (東京)

「長期気管カニューレ留置により気管腕頭動脈瘻を生じた 1 症例」

下麥哲也, 西元謙吾, 松根彰志, 黒野祐一

井畔能文, 渡辺俊一, 四元剛一 (鹿児島大学医学部第二外科)

第 9 回 九州ニューキノロンシンポジウム 11月17日 (福岡)

「副鼻腔炎に対するレボフロキサシンの濃度依存的投与方法の検討」 (中間成績)

松根彰志

第34回 九州合同地方部会 日本歯科放射線学会 11月24日 (名古屋)

「両側多発性 Warthin 腫瘍の 1 例」

川床正剛, 佐藤強志, 川畑義裕, 河野一典, 松根彰志, 馬嶋秀行

鹿児島大学歯学部歯科放射線学講座

5. 国際学会発表

6th Asian Research Symposium in Rhinology

「Immune Responses in Murine Nasal Mucosa against Recombinant P6 of *Haemophilus influenzae* with Recombinant Mutant Cholera Toxin A1」

N.Tanaka, T.Fukuiwa, S.Fukuyama, S.Udaka, C.Hara, A.Guadiz, Y.Yuki and Y.Kurono

「Effects of Cetirizine on NF- κ B Activation and Expression of Adhesion Molecules in Cultured Human Endothelial Cells」

J.Ohori, S.Matsune, M.Ushikai, Y.Kurono

4th Extraordinary International Symposium on Recent Advances in Otitis Media April 16–20
(sendai,Japan)

[Clinical Trial on Primary Treatment of Acute Otitis Media in Children]

M.Ushikai, I.Miyahara, S.Matsune and Y.Kurono

[Mucosal Immune Responses Against Intranasal Administration with Recombinant P6 of
Haemophilus influenzae Fused with Recombinant Mutant Cholera toxin A1]

**T.Fukuiwa, S.Fukuyama, N.Tanaka, S.Udaka, C.Hara, A.Guadiz Y.Yuki and
Y.Kurono**

The 8th Joint Meeting of Five Departments of Otolaryngology June 15–16 (Seoul, Korea)

[Application of Cyberknife for the Treatment of Juvenile Nasopharyngeal
Angiofibroma]

K.Deguchi, H.Nishizono, T.Fukuiwa and Y.Kurono

[Case Report of Extramedullary Plasmacytoma in the Sphenoid Sinus]

M.Iwamoto, I.Miyahara, S.Matsune and Y.Kurono

1. 新入医局員紹介

谷本 洋一郎



自己紹介：研修医として鹿児島大学耳鼻咽喉科に入局してから早いものでもう10ヶ月の月日が過ぎようとしております。といっても私の場合は昨年10月から麻酔科研修をしておりますので、耳鼻科医としてはまだまだ本当に未熟で、4月から今年の新入局員と一緒にまた1から頑張っていくつもりです。耳鼻咽喉科という学問への興味と手術がしたいという気持ちで入局しましたが、始めのうちは本当にこの道でよかったのかなと悩んだこともありました。でも今では自分の選択に間違いはなかったと思っております。4月からまたいろいろな先生方にご迷惑をかけてしまうと思いますが、御指導宜しく申し上げます。

早水 佳子



自己紹介：昨年の今頃、そう、大学6年ともなると、入局先を選択するに当たってやはり、悩みに悩みました。周りは次々に決定していく中で、私は割と遅い方だったと思います。「今のご時世、男女なんて関係ない。」とは言うものの、正直なところ、外科の世界に飛び込むのは少しとまどいがありました。しかし、自分の気持ちに従い、又教授のお人柄にも惹かれ、素直にこの道を選んだように思います。早、一年が過ぎようとしておりますが、未だに初めての連続で日々いろいろな刺激を受けております。この期間で私には一つ、大きな変化が有りました。それは、自分は、何分男気質の所が有るため、入局当初、周囲の先生方より「早水センセイ」なんて呼ばれると、他人行儀の様でもあり、照れくさかったのです。所が、最近では皆さんが気軽に「ハヤミズ」

と御声をかけて下さるようになりました。その変化を、自分なりに（私も少しは耳鼻科ファミリーとして仲間に入れたのかな？）と勝手に解釈し、嬉しく思う今日この頃です。知識も経験も浅く、御迷惑をかけることも数知れないとは思いますが、その際には、罵声と共に私の名を呼んで下さい。頑張って喰らいついて行きます。今後とも何卒宜しくお願い致します。

自治医科大研修医
永野 広海



自己紹介：始めまして新入局員候補？の永野広海です。候補としたのは、自分は自治医大出身のため、原則的にこの時期の入局は不可能だからです。本来は、三ヶ月の期間耳鼻科で研修するつもりでしたが、人事等の都合により、七ヵ月半研修することができました。医師なりたてのみぎひだりもわからない時期、手取り足取り指導してくれた先生たちには、感謝の念にたえません。現在市立病院にてローテーション研修中（脳外科）ではありますが、今後僻地での医療活動が終了したら、頭頸部領域を中心に活動していきたいと考えております。諸耳鼻咽喉科の先輩先生方に色々とお迷惑をかけるとは思いますが、今後とも御指導御鞭撻の程よろしくおねがいします。

2. 医局人事（平成14年5月現在）

教 授	黒野祐一
助 教 授	松根彰志
講 師	牛飼雅人，宮之原郁代
助 手	出口浩二，相良ゆかり，福岩達哉
医 員	林 多聞，福山 聡，吉福孝介，積山幸祐
研 修 医	谷本洋一郎，原田みずえ，宮下圭一
大学 院 生	大堀純一郎，田中紀充，孫 東
医 局 長	出口浩二
外 来 医 長	宮之原郁代
病 棟 医 長	福岩達哉

関連病院（平成14年5月現在）

国立病院九州循環器病センター	（副院長：勝田兼司）
	松崎 勉，岩坪哲治
国立療養所星塚敬愛園	早水佳子
県立大島病院	西元謙吾，高木 実
鹿屋医療センター	平瀬博之，唐木敦子
県立北薩病院	大城 浩
出水市立病院	関 大八郎，下麥哲也
済生会川内病院	岩元光明
鹿児島生協病院	江川雅彦，森園健介
藤元早鈴病院	岩下陸郎
あまたつクリニック	新納えり子
今村病院分院	河野もと子

3. 学会報告

第11回日本頭頸部外科学会

林 多 聞

平成13年1月26、27日二日間にわたりパシフィコ横浜にて、第11回日本頭頸部外科学会が行われました。大学からは黒野教授、松根助教授、市立病院からは花牟礼先生、積山先生、私は1月から移動となっていたため九州循環器病センターからの参加になりました。松根先生は接触型 Nd/YAG レーザーによる下甲介切除術についてワークショップで、花牟礼先生は下咽頭癌再発例の検討、積山先生は鼻性頭蓋内合併症の3症例、私は内側型眼窩吹き抜け骨折におけるシリコンシート固定の演題発表でした。横浜は雪が降っており、非常に寒かったのですが、学会場内は熱い討論が交わされて熱気あふれる学会になりました。中でも興味深かったのはシンポジウムの音声外科の現状と将来とワークショップのESSの適応でした。音声外科では内視鏡手術、喉頭枠組み手術さらには咽喉食摘、遊離空腸再建後の気管空腸瘻形成術による音声再建が紹介され、その術後の音声も十分なものでした。またESSではその適応の拡大について紹介され、前頭洞手術と涙嚢鼻腔開放術ではpower assisted endoscopic sinus surgery (PAESS)、鼻腔良性腫瘍に対する内視鏡下手術ではそのさまざまな適応と術式について、いずれも興味深いものでした。実際の臨床に役立つ知識となる演題も多く、非常に有意義な学会だったと思います。中華街で本格的な中華を堪能するところまでは言うことない学会だったのですが、あいにくの雪のため鹿児島行き飛行機は全便欠航、陸路にて鹿児島まで帰る羽目となり、学生時代以来となる十数時間の電車の旅は骨身にしみしました。

第13回気道病態シンポジウム

大 堀 純一郎

平成13年1月20日に東京で開かれた第13回気道病態シンポジウムに、牛飼先生、松根先生の3人で参加させていただいた。私にとって、初めての学会発表であったこのシンポジウムは、発表10分、討論10分というとても厳しい学会であった。年末に牛飼先生の御教授の下、実験にいそしんだ毎日をこの会で初めて発表する事となったわけだが、討論の10分間は、「共同演者の牛飼ですけど・・・」という言葉は何度聞いただろうか？と今になって振り返るほど稚拙なものであったといわざるを得ない。まあ、この学会をスタートに3月までに5つの学会をこなすことになる記念すべき初学会であった。

第19回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会

高 木 実

第19回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会は平成13年3月に大阪にて開催されました。参加者は黒野教授を筆頭に松根助教授、福岩助手、大学院生の大堀先生、大阪大学微研に国内留学中の福山先生、そして私高木が参加しました。会場は一会場であり、すべての参加者による討論が可能であり、活気に満ちあふれる学会でした。なかでも史上最年少ではないかと思われる福山先生のシンポジストは素晴らしかったです。僕自身は普段の緊張の中での生活から抜け出られたという安堵感？からなのか、学会中40℃近い熱をだし、ボ～としたなかで学会に参加・口述をしており、今思い出しても、よく思い出せないことばかりです。それにしても、来年この学会を鹿児島大学が主催することは、名誉なことと思ひ、うれしいです。しかし今までの様に立派な学会を成功するためには、鹿児島大学耳鼻咽喉科医局員だけでなく、鹿児島大学を支えていただいているすべての人々の協力なくしてはあり得ないことと思ひます。来年素晴らしい学会が出来ますように！！ここで第19回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会について内容が記載されていないことを深く御詫びします。

第13回日本喉頭科学会総会

唐 木 敦 子

平成13年3月16日、17日に、滋賀医科大学主催で第13回喉頭科学会総会が開催されました。医局からは、黒野教授、大堀先生、そして私の3人が出席しました。鹿大からは、大堀先生が「喉頭真菌症の1例」について、私は「Ejnell法による声門開大術の経験」について発表しました。私にとっては、初めての大きな学会発表であり、原稿を読むことで精一杯で、教授にfollowして頂きながら、ようやく演題を終えることができました。

シンポジウムは、神経喉頭科学と最近の喉頭画像診断をテーマとしたもので、特に後者では喉頭の3次元解析が話題の中心であり、大変興味深いものでした。また、特別講演では、Mark Bouchayer先生による病理解剖学と音声外科についての講演がありましたが、英語がなかなか理解できず、残念な思いをしました。

よく分からない事も多くありましたが、他大学の様々な症例、研究に触れることができ充実した2日間でした。

第13回日本アレルギー学会春季臨床大会

田 中 紀 充

平成13年5月10日から12日まで3日間、パシフィコ横浜にて開催され、当医局からは松根先生と私が参加させていただきました。内科、小児科、皮膚科といった他科の先生方の参加される大きな学会は当然初めての経験であり、シンポジウムを中心に基礎的分野から各科疾患へのつながり、関連を聞くことができました。また、具体的な減感作療法セッションもあり、学会後、鼻アレルギーの減感作療法に外来で積極的に取り組めるようになったのもよかったです。

私は、“局所及び全身性好酸球増多を伴った副鼻腔炎の1症例”という演題で口演しました。鹿児島からの演題は、私の1題のみで内科等からの発表はありませんでした。参加させて頂いたことに感謝するとともに、鹿児島ではまだ数少ないアレルギー専門医

を取れるように勉強しようと，“臨床アレルギー学”を購入しました。（未だ折り目一つなく本棚に飾ってあります。）

中華街，横浜球場（横浜阪神戦三塁側内野席）のキーワードをつけて，学会報告とさせていただきます。

第102回日本耳鼻咽喉科学会総会

岩 元 光 明

平成13年5月17～19日に，シーホークホテル&リゾートにおいて第102回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会が開催され，大学からは黒野教授，福岩先生，田中先生，私の4人が参加しました。自分の演題は初日の午前中に終わり，あとは興味のある演題と思うのですが，会場が9ヶ所もあると時間が重なったりして，なかなか思うように聴く事はできませんでした。大きい学会ですので内容は盛りだくさんでしたが，他の学会とは違って，開業されている先生方や勤務医の先生方にお会いすることが多いので，むしろそちらのほうが今となっては印象として強く残っています（特に夜の方）。また，シーホークで学会とくれば野球観戦も，と思っていたのですがさすがにそれは無理で，ホテルのラウンジから最後の花火と，観戦終了後の人や車の行列を見ただけでした。機会があればのんびりと野球観戦でもしたいものです。

第25回頭頸部腫瘍学会・第22回手術手技研究会

西 元 謙 吾

平成13年6月21日から23日の3日にわたり初夏の札幌にて，第25回頭頸部腫瘍学会，第22回手術手技研究会が行われました。この時期の札幌は雨も少なく，適度に暖かい非常に過ごしやすいという噂だったのですが，札幌到着と同時に小雨まじりの肌寒い気温に参加したメンバー（特にアロハシャツで札幌入りした濱崎先生）は少し戸惑いました。

この学会には、私西元、福岩先生、濱崎先生の3人が参加させていただきました。(実はこのメンバーは6年前に札幌で鼻科学会が行われた時にも参加していたちょっといわくつきの面々でした。)

さて、我々の発表ですが、私西元は、硬口蓋悪性腫瘍手術後の硬口蓋全欠損症例のプロテーゼ使用についての発表をさせていただきました。私のセッションには歯科口腔外科の先生が多く参加しており、発表内容ももろに歯科補綴関係のものであったので、我々耳鼻咽喉科が考え付きもしない、突拍子もない質問がくるのではと構えていましたが、座長の先生から少し質問があっただけでちょっと拍子はずれでした。歯科の先生達にとっても珍しい症例だった様です。福岩先生はサイバーナイフについての発表、濱崎先生は頸部リンパ節転移と画像診断についての発表でしたが、どちらもそつなくこなし、やれやれといった感じでした。(福岩先生はさらに分子腫瘍研究会でも発表していましたが。)

学会全体の印象ですが、会長が歯科口腔外科の先生だったせいか歯科の先生が多く、いつもと雰囲気違ったように思えました。手術手技についてのシンポジウムでは、その手術手技について全くイメージがわからないということはなく、我々も少しずつ進歩しているのでは？

北海道の食べ物は相変わらず美味しく、毎晩おいしいものを楽しませてもらいました。夜のネオンも相変わらず魅力的で困ります。やっぱり、北海道はいつ来てもいいなと思いつつ暑い鹿児島に戻ってきました。

第63回耳鼻咽喉科臨床学会

田 中 紀 充

平成13年6月29日・30日、沖縄コンベンションセンターにて開催され、当医局からは、黒野教授、岩元先生、私が参加いたしました。

大山勝名誉教授が教育講演(慢性副鼻腔病態の変遷:夜陣教授)の司会を、黒野教授は、滲出性中耳炎におけるマクロライド療法の位置付けと題してランチョンセミナーの講師をつとめられました。岩元先生が頭蓋内へ進展したコレステリン肉芽腫の1例、私が、ナビゲーションシステムを用いた内視鏡下鼻内副鼻腔手術の経験の演題で発表しま

した。

梅雨空の鹿児島を立ち、真夏の太陽照りつける沖縄へ。スーツから海パンに着替え、詳細は書くまでもありません。教授と朝食時ゆっくり話げできたこともふくめ（未だそのときの話が実験結果に結びついてははませんが）、楽しく充実した学会でした。

第14回日本口腔咽頭科学会総会

下 麥 哲 也

第14回日本口腔咽頭科学会学術講演会は平成13年9月13日～9月15日の3日間にわたり、東京都の北とびあで開催されました。

当教室からは、西元先生、田中先生に加え、私が演題を發表させて頂きました。私にとっては、初の本格的な学会發表の機会であり、予演会で教授にたっぷりしごかれたにもかかわらず、会場ではビビりまくりでした。学会自体は、豊富なビデオ演題と活発なディスカッションで盛り上がっていましたが、私の頭の中は、自分の發表で一杯で、半分も内容を覚えてははせん。

あいた時間は観光をと思ったのですが、北とびあの所在地、王子は想像以上に何もなところ、谷本先生の「西駅周辺よりも、何もなところですね」という台詞だけが、わびしく王子の夜空にこだましたのでした。

第40回日本鼻科学会総会

森 園 健 介

平成13年9月28日より29日までの2日間、第40回日本鼻科学会総会が栃木県宇都宮市で開催されました。当教室からは黒野教授、松根助教授、出口先生、永野先生と私が参加し、以下の3題を發表致しました。

「ヒト培養纖維芽細胞からの VEGF 産生の制御」（松根彰志，他）

「頭蓋内へ進展した巨大な多発性前頭洞嚢胞の一例」(出口浩二, 他)

「アレルギー性鼻炎を合併した慢性副鼻腔炎の上顎洞粘膜所見」(森園健介, 他)

私にとって初めての全国規模の学会での発表であったのですが, 発表内容の統計データ処理等が充分でなく, 会場入りしてからの手直しが必要となってしまいました。

最近の3県合同地方部会などではスライド作成ソフトの画面を直接表示する方法なども行われており, 非常に便利になっています。しかし大規模な学会では当然スライドによる発表しか受け付けておらず, この段階での手直しは致命的でした。万事休むかと思いましたが, 永野先生のご協力で先生の母校である自治医科大学の機械を使わせてもらうことができ, なんとか発表に間に合わせることができました。とはいえ自分にとって満足の行く発表はできず, 悔いの残る内容でした。

学会以外ではあまり時間的余裕もなく観光することは出来ませんでした, 宇都宮名物の餃子を十二分に堪能することが出来て良かったです。(家族や病院のスタッフにお土産を大量に買いこんだら, 出口先生に呆れられました…)

第11回日本耳科学会総会

(H13. 10. 11~13, 神戸)

出口浩二

今回, 私は初めて耳科学会に参加, および発表をさせていただきました。三日間とも好天に恵まれ非常にきれいな神戸の景色が印象的でした。

以前より参加された先生方より耳科学会については, 非常に aggressive な会であると聞いていましたが, その評判を裏切らない雰囲気が漂っていました。その中でビデオ演題では, その筋の第一人者の手技を見ることが出来たのも有意義であったと思います。

また, 私にとって最終日のランチオンセミナーが印象的でした。和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科山中昇教授の「耐性菌による中耳炎の治療戦略」についての御講演でした。このなかで日常診療で注意しないといけない pitfall 的なことも含めて, 印象に残った点から順に自分で理解できた範囲で述べてみたいと思います。

- 1) S.aureus は外耳道皮膚からの contamination で起炎菌でないことが多い。
- 2) 外来診療で急性中耳炎に対して抗生物質の処方を行うことがあるが、痛みの訴えがなくなったことで、母親が勝手に治癒したと判断し抗生物質を最後まで内服しきっていないことがある。このことが耐性菌を生む原因となる。
- 3) 鼻咽腔のぬぐい液が OMA の起炎菌の検出につながる。
- 4) 耐性菌のリスクファクターとして
 - ・二歳以下
 - ・集団保育
 - ・OMA を反復する
 - ・抗菌薬の使用既往がある などがあげられる。

(あと medication について日常診療において役立つ投与方法の例示があり、またその他盛りだくさんの内容でしたが、自分の頭の中で理解できたことのみ挙げることとし、この場では割愛させていただきます。)

第53回日本気管食道科学会総会

下 麥 哲 也

第53回日本気管食道科学会は平成13年11月29日～11月30日の2日間にわたり、東京都の京王プラザホテルで開催されました。

当教室からは、私が演題を発表させて頂きました。私にとっては、学会発表の機会も2度目、当直中に経験した症例の発表で、自分なりに思い入れのある症例でした。

学会では、ビデオ演題も豊富で、特に外科症例のビデオの美しさ、理解しやすさには驚きを覚え、かぶりつきで勉強させて頂きました。自分としては、内視鏡の歴史と発達、そして内視鏡を活かした新たな手術の可能性についての演題に興味を覚えました。学会を通して、外科、内科、耳鼻咽喉科と幅広い分野での、活発なディスカッションが繰り返

広げられ、フルコース料理を平らげたような満足感が印象的でした。

さてさて、お楽しみのお時間ですが、京王プラザホテルは都庁のすぐ傍にあり、都庁を見上げながら学会会場に歩くのはなかなか壮観でした。そして、夜の新宿ではホンモノの館ひろしを目撃、ミーハー根性まるだしで、サインをねだりたかったのですが、ロケ中だったので無理でした。そして、最後に僕はS先輩に連れられ、新宿歌舞伎町へと消えていったのです……。良い子は真似をしないように。

4th Extraordinary International Symposium on Recent Advances

福 岩 達 哉

平成13年4月16日から20日まで上記学会が宮城県仙台市で開催されました。黒野教授、牛飼先生と私の3人で出席して参りました。

私は「MUCOSAL IMMUNE RESPONSES AGAINST INTRANASAL ADMINISTRATION WITH RECOMBINANT P6 OF Haemophilus influenzae FUSED WITH RECOMBINANT MUTANT CHOLERA TOXIN A1」というタイトルで発表させて頂きました。これはインフルエンザ菌外膜タンパクである P6 からリコンビナントタンパクである rP6 を作成し、さらに遺伝子組み換えにてコレラトキシンの A1 サブユニットのみを取り出し、これら2タンパクを融合化させて作成した rP6-mCTA1 を用いて、マウスにおける経鼻粘膜免疫が確立できるかどうかを調べた実験の結果です。国際学会での発表ということで、質疑応答でかなり難渋させられました。

また、牛飼先生は小児の急性中耳炎の治療プロトコルに関する演題でご発表されましたが、さすがに見事なプレゼンテーションであり、その内容はもとより、国際学会での発表に関しても大変勉強になりました。

仙台は第8回日本耳科学会で訪れて以来2回目の訪問だったのですが、牛タンと日本酒の旨みにまたしても酔いしれました。やはり学会はうまいもんがあってこそ、と痛感しました。

6th Asian Research Symposium in Rhinology

大 堀 純一郎

2001年3月10日から11日まで香港で開かれたこの学会に、黒野教授、田中先生の3人で参加させていただいた。初めての国際学会ということで、英語の原稿を片手に、へたくそな英語での発表であった。

初めての・・・にはトラブルがつきもので、出発初日の朝から鹿児島は大雪に見舞われ、一緒に車で空港まで行こうとしていた私と田中は、高速道路の通行止めのために危うく出発の飛行機に乗り遅れるところであった。一方、黒野教授は朝早くから雪の情報をしっていており、タクシーで空港へ向かうという用意周到さで、我々はまさに感服であった。

さて、無事飛行機にも乗れて無事香港についた訳だが、そこはまさに雑居ビルの街であった。日本をうさぎ小屋に住んでいるとたとえるなら、香港のそれはまさに動物実験舎かと思うほどであった (Photo 1)



(Photo 1)

香港での食事は毎日中華、中華、Chinese と中華好きの自分にとっては天国であったが、教授は「中華はグルタミン酸が多いから眠くなる」とおっしゃっていた。そんな言葉に甘えた我々二人は、昼食後の学会場で英語を子守歌にこっくりこっくりお船を漕いでいたように思う。香港の食文化いや中国の食文化はとても豪快で、街の中を豚を担いで歩く人々もいてとてもおもしろかった (Photo 2) ちなみにこの豚はこのあと道路の水たまりでぎぶぎぶと内臓を洗われていた。



(Photo 2)

本題の学会はというと写真 (photo 3) の場所で開かれた。この場所は、Hong Kong Convention and Exhibition Centerで、かの香港の中国への返還式典があった場所らしかった。発表ではどんな質問がくるのかということに恐怖を感じていた。国内学会と違い、「どういう内容の質問がくるのか怖い」という前に、英語での質問をどうやって理解できるのかと



(Photo 3)

いう恐怖であった。案の定、初めての英語は予想よりも高いハードルで、飛べなかった我々は、ホテルロビーの飲茶食べ放題に現実逃避してしまった。(こういうストレスの解消法がいまの我々のBMIを上げていることは言うまでもない。)

こんな初の国際学会であったが、1年目の我々が国際学会で発表できるなんて、感動も一塩であった。

感謝，感謝 (シェイシェイ)

4. 関連病院便り

国立病院九州循環器病センター耳鼻咽喉科便り

勝田 兼司・松崎 勉・林 多聞

平成12年7月より当院は南九州中央病院から国立病院九州循環器病センターへ名称が変更になっております。耳鼻咽喉科患者数の減少が懸念されましたが、平成13年は入院患者数延べ592名、手術件数500件と大きな影響はなかったようです。常日頃から患者様をご紹介いただいている先生方のご協力によるものと感謝しております。当科は勝田兼司副院長、松崎勉医長と私、林の3名で診療にあたっております。以前よりも手術件数など減少の傾向にはありますが、昨今の医療情勢から患者様への説明に十分な時間を割くようにし、患者様の立場にたった医療を実践していく努力を続けております。通常疾患だけでなく、頭頸部腫瘍再建手術も数多く行っており、さらには終末期医療にも力を注いでおります。病棟カンファレンスでは毎回チャプレンの方にも参加していただき意見をもらいながら、また実際患者様とも接して精神面でのケアをしてもらうなど私としては非常に驚かされる医療が実践されています。病棟スタッフも非常に熱心であり、病棟に対して患者様から感謝の言葉を度々いただき、これを糧として日々医療を行っています。ところで医療の標準化や質を向上するため、当院ではクリティカルパスを導入しており、当科でも平成9年より使用しております。先日第1回院内クリティカルパス発表大会があり、私も当科のパスについて紹介しました。普段使っているクリティカルパスの意味について勉強するよい機会でしたが、EBMの実践や医療の効率化、安全性などその効用は今後の医療に欠かせないものと感じました。このような病院、病棟の努力を継続することで今後も九州循環器病センターならではの医療を提供できればと思います。

(文責：林)

県立大島病院便り

河野 もと子・積山 幸裕

開設百周年記念誌によると県立大島病院は明治34年に発足して以来、101年もの歴史を持ち、耳鼻科は、眼科と同時に昭和47年に常設され総合病院となったようです。また、病院は昭和59年に全面改築され現在400床、15科となり現在研修医も併せて医師数44人、名実ともに大島郡の総合、僻地中核病院となっています。

耳鼻科は、定床15人の入院患者と50前後の外来患者の診療に当たっています。

年8回程ある巡回診療は、当病院の特徴で「働く県病院」として大島郡の離党を廻り耳鼻科専門医のいない地域の診療に当たります。

当直は月1～2回めぐってきます。耳鼻科とはあまり縁のない心筋梗塞や脳出血、急性虫垂炎、子宮外妊娠等の救急患者に加え喧嘩による顔面外傷、頸部裂傷、刺創、交通事故による顔面多発骨折等もありました。某科では積山が当直のときは忙しくなるから、翌日はオペを入れるなどの申し送りがなされたとの噂を耳にしました。

最近では、奄美大島沖の不審船事件で負傷した患者が入院になり、扇千景国土交通省大臣がお見舞いのために来院し、ちょっとした騒ぎになりました。

病院の行事としての歓迎会、奄美祭り（夏祭り）、運動会、忘年会、新年会、送迎会等のほか、部活動も盛んで特にドクターズとして参加している市群社会人ソフトボール大会は、ほとんど強制参加のようでした。他にもゴルフ部、バレー部、テニス部等ありいろいろ楽しんでいる先生方も多いようです。

個人的には、龍郷町赤尾木海岸で開催される奄美黒潮カップ（ウインドサーフィン）にむけ頑張っていました。冬の奄美の海で練習中に、ぎっくり腰になり、そのまま動けなくなり、死ぬ思いをしました（動けぬまま運良く岸に流されました）。腰は完治まで一ヶ月かかり、その間は、まともに動けず、手術前の鎮痛薬が手放せませんでした。何事もやりすぎには注意しましょう。

奄美にはきれいな海があります。マリンスポーツには最適です。（文責：積山）

県立北薩病院便り

相良 ゆかり

北薩病院は、大口市よりさらに西へ進み、標高50mほど高くなるため、噂通り冬は厳寒の地となる所です。朝晩はフロントガラスにお湯をかけて氷を解かさなければなりません。お湯をかけたところからまた凍っていくので悲しくなってしまう。ただ、これでも例年に比べて暖冬だということなので、これまでの寒さを考えると身の毛がよだつ思いです。大口市民の方の忍耐力には頭が上がりません。

さて、北薩病院は昨年4月より1人の診療体制となっており、前任の上野先生から引き継いで7月から診療しております。月曜日から金曜日まで平常診療で、月曜日と金曜日は午後からアレルギー外来をしています。火曜日は午後は検査日となっており、主にエコー検査を行っています。水曜日は外来 ope 日、木曜日が全麻 ope 日となっています。全てを一人でこなすのは想像していた以上に大変で、時間どおりに進まないこともあり、患者さんには迷惑をかけてしまっていたこともあるかもしれません。しかし、北薩病院の医局は非常にアットホームで、他科の先生方とも交流があり、何か解らない事あるいは困ったことなどがあれば、何でも相談にのってくださり大変有難く、また勉強になりました。こんなに医局がまとまっている病院はめずらしいのではないかと思います。

最後に北薩地方には観光名所が幾つかあります。春は忠元公園の桜、夏は奥十層、秋は曾木の滝の紅葉、冬は北海道なみの寒さが体験できます。是非、いらっしゃってください。

県民健康プラザ鹿屋医療センター便り

平瀬 博之・唐木 敦子

早いもので私が鹿屋医療センターに来て一年半が経過した。

ここ鹿屋は私の故郷で、当院の赴任に当っては人知れぬ思いやプレッシャー。赴任させていただいた黒野教授の期待へ、少しでも報いたいという思い。前部長の花田先生と比べて経験不足を否めない自分への焦りを感じ、大変な緊張の中で初日をむかえた事が

今だ記憶に新しい。

当院は大隈半島の中核病院で、特に耳鼻咽喉科に至っては入院および手術が唯一可能な施設である。

私が赴任以来一番頭を悩ました事は、日々の診療や手術もさる事ながら、14床しかない当科のベッドの有効利用（手術症例、末期癌症例、急患症例の入院）と手術予定（約一ヶ月の手術待ちの状態）の計画・作成である。その事で悩む度に、前部長の諸先生方がいかに偉大であったか頭が下がる思いと同時に、少しでも近づきたいと励む日々である。

そして、苦悩しつつも日々は流れ、振り返ると一年半の間に手術症例は454例に及んだ。

これは自分にとって何ごとにも変えがたい大きな財産であると同時に、これだけの症例が集まるのもまた前部長をはじめとする諸先生方の当院での頑張りに他ならないものと感謝の念を想う。

2001年の1月～12月の間の手術症例は306例で、その内訳を以下に示す。

手術の状況（2001年1月～12月）

- a) 耳科領域（内悪性腫瘍 0件） 22件
1. 耳瘻孔摘出術 5件 2. 鼓膜閉鎖術 4件 3. 鼓膜形成術 4件
4. 鼓室形成術 8件 5. 耳科腫瘍手術 1件
- b) 鼻科領域（内悪性腫瘍 0件） 126件
1. 鼻茸摘出術 3件 2. 鼻中隔矯正術 46件 3. 下鼻甲介切除術 20件
4. 内視鏡鼻内手術 47件 5. 鼻外副鼻腔手術 1件
6. 鼻・副鼻腔腫瘍手術 1件 7. 鼻前庭嚢胞摘出術 1件
8. 眼窩ふきぬけ骨折整復術 3件 9. 頬骨骨折観血的整復術 4件
- c) 口腔・咽頭領域（内悪性腫瘍 2件） 98件
1. 扁桃摘出術 79件 2. アデノイド切除術 11件 3. 軟口蓋形成術 1件
4. 舌小帯形成術 2件 5. 舌腫瘍切除術 3件
6. 中咽頭悪性腫瘍手術 1件 7. 口腔底膿瘍切開術 1件

- d) 喉頭・気管・食道領域（内悪性腫瘍 4件） 71件
- | | |
|---------------|-----------------|
| 1. 気管切開術 12件 | 2. 喉頭直達鏡下手術 44件 |
| 3. 食道異物摘出術 2件 | 4. 気管支異物摘出術 1件 |
| 5. 喉頭全摘術 1件 | 6. 気管口狭窄開大術 1件 |

- e) 顔面・頸部等領域（内悪性腫瘍 9件） 40件
- | | |
|--------------------|--------------|
| 1. 唾石（含顎下腺）摘出術 12件 | 2. がま腫手術 1件 |
| 3. 唾液腺腫瘍手術 12件 | 4. 頸嚢摘出術 5件 |
| 5. 甲状腺腫瘍手術 12件 | 6. 頸部廓清手術 3件 |

ただ、これらの手術症例が本当に評価されるのはこれから先のことで、現在までの症例に対する follow を怠ること無く、これからも来院してくださる患者さんに対して、赴任当初の緊張感と敬意の念を持って接し、前任の諸先生方の築かれた信頼を汚すことの無いよう頑張っていきたいと思う毎日である。（文責：平瀬）

鹿屋県立医療センターへ異動となって、早2週間が過ぎました。今、ようやく仕事の流れを把握しかけたところです。この2週間の中に、根治的頸部廓清術2件を含む8件の手術の助手をさせて頂きました。ここ、県立鹿屋医療センターは大隈半島の中核病院ということもあり、今後も、手術・外来とも多岐にわたる症例に携わることができそうです。この恵まれた環境を活かせるよう邁進していきたいと思います。（文責：唐木）

鹿 児 島 市 立 病 院 便 り

唐木 敦子

平成13年4月から、10月までの半年間、鹿児島市立病院で研修させて頂きました。

市立病院には4つのユニットがあり、新米の私もユニットを一つ借り、鹿島先生、花牟礼先生、笹野先生、私の4人で診療を行っていました。3人の先生方にはそれぞれにたくさんの紹介があり、忙しく診療されている中で、私は比較的軽症な患者さんを中心

に診させて頂きました。そのため、小児の急性中耳炎や副鼻腔炎を中心とした診察の機会が増えました。赴任当初は泣かせてばかりで、鼓膜の所見すら満足にとれないことが多く、看護婦さんから、「先生はたまに、うなりながら診察してますよ」との指摘をうけ、ショックをうけたことを覚えています。最近では市立病院での特訓の成果により、子供も泣かなくなりましたが、「猫なで声や赤ちゃん言葉を使いながら先生は診察している」（子供と同じレベル？）との指摘をうけ、またまたショックを受けております。

手術は術者として扁桃とデビコン、助手として3人の先生方の多岐にわたる手術に着手させていただきました。扁桃は毎週1～2件行いましたがなかなか上達せず、頻回に応援をお願いし、とうとう麻酔科の先生方の間でも有名になってしまい、恥しい思いをしました。（現在はその当時より大分上達していると自負していますが？・・・）

また、研修医にとって最も恐怖だったのが、救急外来当直です。初めての挿管（その後麻酔研修でさんざんやりましたが）や心臓マッサージといった救急のABCから、外傷、薬物中毒、小児のたばこ誤嚥など、直接生死に即時に関わるさまざまな症例を経験する事ができました。

3人の諸先生方には力不足でご迷惑をおかけすることばかりでしたが、大学病院とはタイプを異とした以上のような御指導、経験が、最近鹿屋での診療に役立っていると思う毎日です。

（文責：唐木）

出水市立病院便り

関 大八郎

出水に来て早いものでまる2年になりました。当初、部長出張は初めてのため（一人部長は何度か経験したが…）不安や気負いが多かったのですが、医局の先生方の協力も得ながらやっと慣れてきました。今では北薩地区の拠点病院としての役割を担えているのでは？と思います。今回異動時期となり、3月まで一緒に仕事をした吉福先生とは患者に対しての意思統一をはかり、どちらが診ても同じような説明や治療方針に出来たことは、良かったと思っています。

さて、出水市立病院の特徴ですが医局員の皆さんがご存じのように、救急外来は大変

です。最近はだんだん患者もエスカレートしてきているようで、まさにコンビニ病院ではないかと思うほどです。救急車がきたら、まず本物か偽物かを見分けるのが大変です。そうかと思えば歩いてくる人でも本物もあったりして、当直のときは心身共にストレスがたまります。しかし、そうしたことで他の科のドクターとより連携が取れ、親しくなれる点もあります。この病院ぐらい他科の先生と仲良くなれるところは、県立大島病院くらいなものでしょうか??また当院での耳鼻咽喉科としての特色は地方病院にしては気管切開が多いということです。いわゆる他科の紹介患者がらみですが、平均すると月に1-2回は気切をやっています。ベンチレーション管理下以外のアウエイクでの切開も多いので結構、緊張します。

出水に来てからの楽しみとして週一回のサッカーがあります。今までサッカーはしたことがなかったのですが、一年数ヶ月続けた今となっては出水市立病院チームにはなくてはならない存在になっていると自負しております。いわゆるムードメーカーとしてですが……。また月一回のソフトボールやボーリングもいい気晴らしになります。夏には車で数分で行ける海水浴場もあり、灰も降らず、住んでみればそれなりにいい町だと思います。しいて言えば飲み屋街がしょぼいことと鹿児島まで遠いということでしょうか。

4月より下麥先生が赴任となりまた新たなスタートとなりますが、当病院での役割を認識して今後も日々努力したいと思っています。(文責：関)

済生会川内病院便り

岩元 光明

昨年の10月に川内へやってきて、約半年が経ちました。一人で勤務するのは、思っていた以上に大変なことだなあと、最近思います。また十二指腸潰瘍が、再発しそうな今日この頃です。当直も、すごいストレスでしたが、今までの内科系の当直から外科系の当直に変わり、少しだけ楽になりました。

こちらへ来て、一番よかったなあとおもうのは、家族と過ごす時間が少し増えたことです(ちなみに子どもは、3歳と1歳で今やたらとやかましいのですが)。特に下の子

は、今まであまり接する時間が多くなかったので、こちらに来てからなつくようになりました。

紹介率を上げるようにとか、短期の入院を増やすようにとかいろいろ病院側からの努力目標も言われますが、できる範囲で、（とりあえず二人体制に戻れるまで？）頑張ろうと思います。
(文責：岩元)

鹿 児 島 生 協 病 院 便 り

森園 健介

皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

平成13年7月から鹿児島生協病院で勤務している森園です。川内済生会病院、県立鹿屋病院に続き、3回目の関連病院だよりを書かせてもらうことになりました。今回は大学病院に引き続いて鹿児島市内、しかも大学の近くの生協病院であったので引越しの手間が要らなかったのが助かりました。

鹿児島生協病院に勤務して受けた印象は、外来診療で子供の患者さんが非常に多いということです。これまでの病院でもそれなりにはいらっしゃったのですが、ここは別格です。先日、1年目の永野先生が体調不良でたまたま受診されたことがありましたが、「小児科かと思いました」とのコメントをいただきました。(学校が休日の第二・第四土曜日だったこともありましたが。)やはり、谷山という住宅地に病院がある点が大きいかと思います。

子供と接するのが苦手な小児科を候補から消した僕にとってはなかなか厳しいものがあり、勤務して最初の1週間ぐらひは子供の泣き声だけで疲れてしまって、ぐったりしながら帰宅しました。最近は少し慣れてきましたが、まだまだ泣かせてしまうことも多く、自分の未熟さを痛感する毎日です。

この病院ではじめて体験したこともあります。患者さんと病院のコミュニケーションを高める「外来班会」という会を定期的に行っており、その一環として外来患者さんに対して疾患や健康などについて医師が講義をするというのがありますが、それを一度担当させてもらいました。

やらせてもらったのが3月でしたので、花粉症について講義しました。パンフレットなども作成して、説明用の資料も用意して、緊張しながら本番を迎えたのですが、いざ始めようとする、全然患者さんが集まらない。マイクセットなども用意してもらったのですが、結局一人二人と向かい合いで座りながら話をして終了という地味な結果に終わってしまいました。みんな他の科を受診するので忙しかったんだと自分を無理やり納得させてはみたものの、少しさびしい気持ちになってしまいました。講義のテーマとしては悪くなかったと思うんですけど…。

また、平成14年度は鹿児島生協病院耳鼻咽喉科にとって変化の年になりそうです。それは秋頃に現病院のそばに谷山生協クリニックができる予定になっており、これに伴い内科・小児科・外科などのメジャーな科の外来は谷山生協クリニックに移転する予定になっているからです。

ということは、主な科が移動してしまった寂しい生協病院で耳鼻科は働くことになるということですね。いや、実際どんな感じになるかはよくわかりませんが、そんな感じになるかもしれないということ。

こちらでもう少し勉強させてもらうことになりそうなので、子供との接し方をもっとがんばりたいと思います。(文責：森園)

今村病院分院便り

岩坪 哲治

昨年の七月から今村分院に赴任して9ヶ月が経とうとしています。この原稿が掲載されるころには勤務地が異なるとは思いますが今村分院での勤務について述べたいと思います。こちらに来て一番感じることは患者数が少ないといったこともありますが、そのわりに他科からの紹介患者が多いということです。透析や血液内科があることもあり鼻出血が多く最初はびっくりしました。また、血液内科などから頸部腫脹等でコンサルトされることも度々で未熟な自分が答えていいのかなどかなり弱気になってしまうことも多かった気がします。

診療に関しましては、月曜日が午前中のみ、火曜日、木曜日、金曜日が午前、午後、

土曜日が午前中のみ外来をおこなっており火曜日は時々大学に全麻を依頼して扁桃等をおこなっています。月曜日の午後と水曜日は大学にて研修日ということにさせていただいております。初めて一人体制を経験しましたが、二人体制で部長の先生と働いたり、大学で上の先生方と働くのがいかに頼りになり安心感があるかということを実感しました。また、自分の実力のなさを痛感しましたので、これからも日々臨床の力がつくように努力していきたいと思っております。

(文責：岩坪)

XII. 関連病院 (平成14年4月現在)



病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
国立病院九州循環器病 センター	892-0853	鹿児島市城山町8-1 TEL:099-223-1151 FAX:099-226-9246	月・水・金 (8:30～11:30)	月～金
国立療養所星塚敬愛園	893-0041	鹿屋市星塚町4204 TEL:0994-49-2500 FAX:0994-49-2542	木・金 (8:30～17:00)	
県立大島病院	894-0015	名瀬市真名津町18-1 TEL:0997-52-3611 FAX:0997-53-9017	月～金 (8:30～10:00)	火・木・金
県立北薩病院	895-2526	大口市宮人502-4 TEL:0995-22-8511 FAX:0995-22-6783	月～金 (8:30～11:00)	水・木
県民健康プラザ 鹿屋医療センター	893-0011	鹿屋市打馬1-5-10 TEL:0994-42-5101 FAX:0994-44-3944	月・火・水・金 (8:30～10:30)	月の午後 木
鹿児島市立病院	892-8580	鹿児島市加治屋町20-17 TEL:099-224-2101 FAX:099-223-3190	新患 月・水・金 再診 火・木 (8:30～11:00)	月・水・金
出水市立病院	899-0131	出水市明神町520 TEL:0996-67-1611 FAX:0996-67-1661	月～金 (8:30～11:00) 木のみ (再診) (14:00～16:00)	火・水・金

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
今給黎総合病院	892-0852	鹿児島市下竜尾町4-1 TEL:099-226-2211 FAX:099-222-7906	月・水・金 (8:30～16:30) 火・木・土 (8:30～11:30)	月～金
済生会川内病院	895-0074	川内市原田町 2-46 TEL:0996-23-5221 FAX:0996-23-9797	月～土 (8:00～11:00) 月・金のみ(再診) (14:00～16:30) 水の午後 第1・第3 特殊検査 第2・第4 補聴器外来 (14:00～16:30)	火・木の午後
かごしま生協病院	891-0141	鹿児島市谷山中央 5丁目20-20 TEL:099-267-1455 FAX:099-260-4783	月・火・木・金 (8:30～17:30) 水・土 (8:30～12:30) (新患は30分前まで)	火・水・木 の午前
今村病院分院	890-0064	鹿児島市鴨池新町11-23 TEL:099-251-2221 FAX:099-250-6181	月・水・木・金 (8:30～17:10) 土 (8:30～11:30)	
藤元早鈴病院	885-0055	都城市早鈴町17-1 TEL:0986-25-1212 FAX:0986-25-8941	月・水・木・金 (9:00～17:00) 火 (9:00～11:00)	火の午後

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
市比野記念病院	895-1203	薩摩郡樋脇町市比野3079 TEL:0996-38-1200 FAX:0996-38-0715	火・木 (14:00～18:00) 土 (9:00～18:00)	
あまたつクリニック	891-0175	鹿児島市桜ヶ丘4-1-6 TEL:099-264-5553 FAX:099-264-1771	月・水・金 (9:00～18:00) 火 (14:00～18:00) 土 (9:00～13:00)	火の午前
垂水中央病院	891-2124	垂水市錦江町1-140 TEL:0994-32-5211 FAX:0994-32-5722	火・木 (13:30～16:00) 土 (8:30～11:30)	
加治木温泉病院	899-5241	始良郡加治木町木田字 松原添4714 TEL:0995-62-0001 FAX:0995-62-3778	月・火・木 (13:30～16:30) 土 (8:30～11:30)	
田上病院	891-3198	西之表市西之表7463 TEL:09972-2-0960 FAX:09972-2-1313	火 (9:00～17:30) 水 夏(14:00～17:00) 冬(14:00～16:20)	

病 院 名	郵便番号	住所 (TEL・FAX)	外来診療曜日	手術曜日
阿久根市民病院	899-1611	阿久根市赤瀬川4513 TEL:0996-73-1331 FAX:0996-73-3708	火・金 (8:30～15:30)	
鯨島病院	891-0406	指宿市湯の浜1-11-29 TEL:0993-22-3079 FAX:0993-22-3019	火・木 (8:30～17:30) 水(13:30～17:30) 土(8:30～12:00)	
栗生診療所	891-4409	熊毛郡屋久町栗生1743 TEL:09974-8-2103 FAX:09974-8-2751	第1・第3 金(8:00～16:00) 土(8:00～10:00)	
豊永耳鼻咽喉科	868-0037	人吉市南泉田町120 TEL:0996-22-2031	第2・第4 土(9:30～15:00)	